

ふるさと

60周年記念号



慶応義塾大学整形外科同窓会誌

ふるさと
慶応義塾大学医学部整形外科同窓会誌

1983

歴 代 教 授

前 田 友 助 教 授

(大 正 1 2 年 ~ 昭 和 2 年)

前 田 和 三 郎 教 授

(昭 和 3 年 ~ 昭 和 2 1 年)

岩 原 寅 猪 教 授

(昭 和 2 1 年 ~ 昭 和 4 1 年)

池 田 亀 夫 教 授

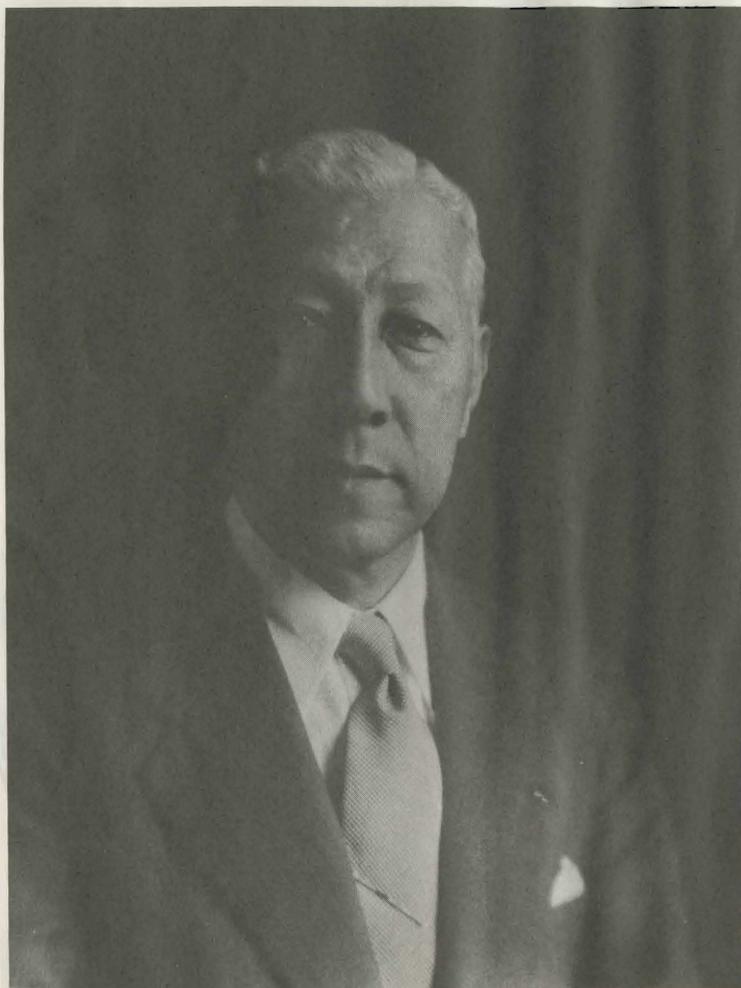
(昭 和 4 1 年 ~ 現 在)

泉 田 重 雄 教 授

(昭 和 4 6 年 ~ 現 在)



前田友助教授



前田和三郎教授



前田和三郎教授



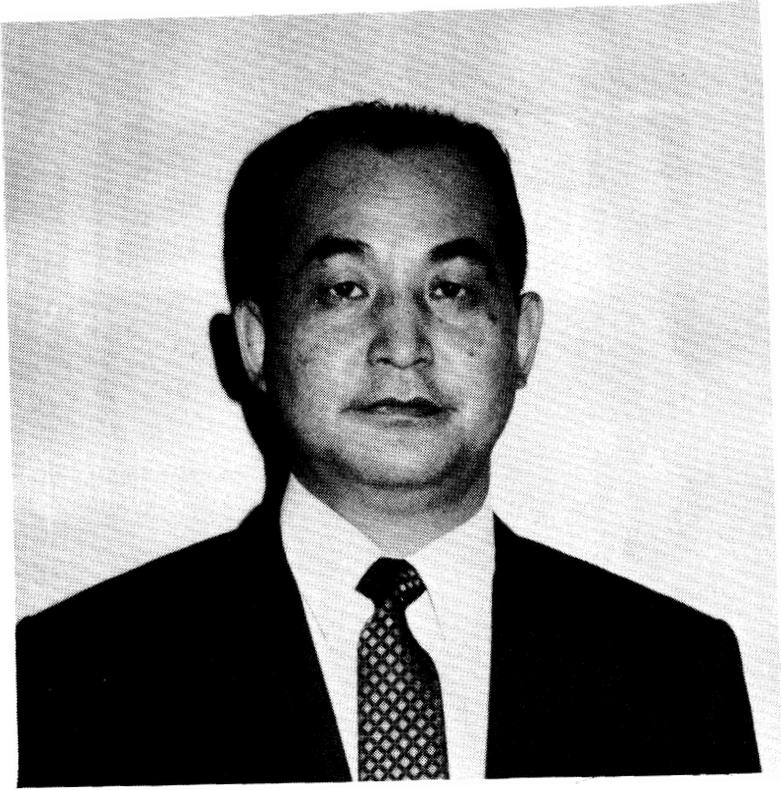
岩原寅猪教授



岩原寅猪教授



池田亀夫教授



泉田重雄教授

目次

整形外科同窓会の生い立ち	伊藤原	2
会長就任に際して	大内正夫	4
昔話	泉田重雄	6
特集 — 慶大整形外科60年にあたり —		7
おめでとう 花岡英弥君 北里賞受賞	福田宏明	37
神奈川県慶大整形外科同窓会の記	今井望	39
新人紹介		41
教室だより		57
古いアルバムから		
編集後記		

整形外科同窓会の生い立ち

前同窓会会長 伊藤 原 11

大正十年前田友助先生による整形外科学開講以来、わが慶大整形外科は本年で満六〇年を迎える。

往時を懐想すると初期には小教室より出発したわけであるが、小生の入局当時でさえも整形外科教室は教授以下数名の医員だけの小教室にすぎなかった。医局は外科と合同で、医局長は必ず外科の医員から選任され、同窓会も外科と一緒に、外科の茂木教授が会長になられていた。教室は独立しているのに自分達の独立した医局も同窓会をも持たない奇妙な教室であった。合同であることは有利な面もあるが、不都合な反面もあり、なんとなく居候的存在で、肩身の狭い思いをする事も少なくなかった。小生等は医局も同窓会も分離していたら必ずすっきりした気分になれるものと考えていた。終戦後、前田先生が外科教授になられ、岩原先生が整形外科専任教授に就任されたので、此の機会に医局と同窓会を外科より分離するのが整形外科教室の発展のためにも、又後輩達のためにも必要であり、是非やらねばならぬ事と考えた。医局長は教室人事であり、小生等外野が容喙すべき事ではないが、せめて同窓会だけでも早く独立させたいと考え、岩原先生の御賛同を得たことを機として早速小生使者となり、前田先生を教室にお訪ねし、「整形外科教室出身の同窓会員も相当多くなりましたので同窓会の分離独立をお許し下さい」とお願いした。先生も従来からの実状をご存知であったので心よくお許し下されたのであった。私共一同は直ちに整形外科同窓会の設立に着手し、岩原会長、野崎幹事の陣容で一応発足することにした。多分昭和二十二年秋頃であったかと思うが、第一回整形外科同窓会を開催して会の発足を見たのである。この時感慨無量の思いで出席した事は今尚忘れえぬ思い出となっている。

戦後整形外科教室は急速に発展の道を歩みつづけ、同窓会員も現在では五〇〇名を越える大人数になり、一部の教室にある方のほかは勤務医、あるいは開業医として地域医療のため思う存分活躍されている。

最近毎日のように新聞紙上で行革とか臨調とかいう言葉が見られるようになり、世はまさに緊縮時代突入の様相を呈している。したがって医療保険制度も経済面で影響をうけ、医師にとって不合理な制度が実施されるおそれがある。今回の保険点数改正にしても単に数字のからくりであって、我々診療担当者にとっては殆んど実利のないものもその例である。

このように医療界は外部からの経済的攻勢と、医師の激増による内部からの競争によりいよいよ困難な時代をむかえるものと思わねばならない。この難局を打開克服できるのは実力ある医師のみである。幸にもわが同窓諸君は一騎当千のつわものそろいであるから、どのような乱世に遭遇しても必ず難関を突破できるものと確信している。終りに同窓諸君の親和と団結により栄えある慶大整形外科の伝統を守っていただきたいと願って止まない。

なお、本年の「ふるさと」は開講六〇周年記念号として発行することにしたので御諒承願う。

会長就任に際して

同窓会会長 大内 正 夫 12

図らずも同窓会のまとめ役を引き受けることになりました。勿論その座にそぐう者とは思いませんし、特に前任者が温厚円満な伊藤原先生だったことを想いますと、野人その任に耐えられるかどうか心配しております。同窓生一同特に幹事の方々の御援助の上務めをまっとうしたいと考えております。

私が入局した昭和九年の整形外科教室は前回教授、岩原助教授（講師から昇格したて）畠中、竜野、野崎、伊藤、小泉、長坂の諸先生、他に外科からのロテイト一二名。フレッシュマンは自分一人、計一〇名位だったと思います。同窓会などはなく、医局も外科にそれに含まれ、正に外科の付属物的存在でした。

終戦後、前田教授は外科に移り、岩原先生が教授に昇格し、始めて整形の教室も、医局も、同窓会も独立しました。然しその頃は教室員も同窓生も少く、恩師である教授を囲んで存在し、校外は教室の延長であり、同窓会々長はその時期の教授がやると云うことでした。

その後教室は急成長し、多数の同窓生も多方面に活躍するようになり、更に大学改革の火の手があたり、同窓会も教室一辺倒より脱却して、昭和五十一年会則変更、昭和五十二年伊藤原先生が独立した新同窓会の会長になったものです。

最近の整形出身人脈は五〇〇名余に上り、教室在籍者より校外同窓生の方が多くなった今日、更に考えを新にする必要があると思えます。

同窓会は会則により、教室員も全部含んでいるものではありませんが、狭義に教室卒業生を同窓生と解釈して、一、教室と同窓会とは対等の関係にあると考えます。

教室は同窓生の心のふるさとであり、生涯教育として、教室の発展を通じて医学の進歩を受け、又同窓会の事務的のことは殆んど教室におんぶせねばならないわけですから、或る程度教室主導型になるのは止を得ないでし

ようが、教室の希望を鵜呑みにして同意すべきでなく、是々非々を同窓生一同の総意に従って決意、行動すべきものと考えます。

二、同窓会は圧力団体になってはならない。

世の一部にこの傾向のあるものありと聞いています。教室の発展に全面協力すべきであることは論を待ちませんが、強力なる先輩、或は経済力をバックにして教室を一方的に圧迫してはならない。親切の押し売りは厳に慎むべきもので、教室の内容・進路に対し、たとえ善意から出たものでも、強圧・干渉は避くべきものと考えます。

三、連帯感を持つよう努めること

教室を出て開業したり、関連病院以外に就職すると、いつとはなしに教室と疎遠となり、相互の連帯感が失なわれがちとなり、近くに來たからと気楽に教室に寄ってみようという気持もうせてくる。

既に実施されている研修会、或は開業税などに楯、鐘等を贈る等の他に良き発想はないか、一同で考えてみたいと思います。

昔話

— ギプス包帯 (一) —

泉田重雄 (23)

早いものである。私も医学を学び始めて四十四年、整形外科を専攻してからでも四十年に垂としている。その間の経験とこれにまつわる種々の想いを綴っておきたいと思う様になったのはつい近頃のことである。今日はギプスの話である。

ギプス包帯が用いられる様になって今年で丁度百三十年である。長く硬化包帯の王座を占めて来た。種々の新しい提唱があるにもかかわらず、ギプス包帯の占める座は揺がない。もっとも最近は昔に較べて可成使用頻度は減ってはいるが、それでも整形外科医にとって極めて重要な治療手段であり手技であってこれが習熟は不可欠である。

昔「脚持ち三年」と云った、例を挙げよう、往年の先天股脱の整復は多くは無麻酔で、「エイ、ヤッ」とローレンツ法で整復し、すぐにギプス固定を行ったが、ローレンツ第一肢位を、ギプス包帯施行中、保持するのが大変であった。

患児は恐怖と整復の痛みから、全身の力をもって暴れる。これを抑え、イナして術者にギプス包帯を捲ける様に、正しい肢位を保持することの習熟に三年を要するの意味である。何にしても全身の力で暴れる児を完全に不動に保持することは致し兼ねる。胴を巻く時には脚の運動は多少許しても胴体は何とか不動に保ち、股関節の固定の時には膝には多少の遊びを与え、膝の固定時には足と(Toe-board)にする等色々工夫をしたものである。

それでも仲々肢位保持が出来ず先生の雷が落ちることがあった。ある時一際体の大きい、力の強い先天脱臼の整復があった。苦心惨胆したが仲々うまく行かなかった。雷は「だから持たせられん」と鳴った。私は脚持三年を過ぎていたのだが……。

特集—慶大整形外科六十年にあたり

五十年前の 整形外科の教室

山内吉雄 (5)

慶応医科大学の創設は大正六年四月一九一七年である。学長北里柴三郎先生、その後北島太一先生が医学部長として活躍された。日本の医学は西欧医学の導入により特に外科医学の発達は麻酔薬の進歩に伴い開発された。外科的治療を要するものは総て一般外科の中に含まれていた。而し骨折と病的な疾患とは治療が或は手術時の医料機械、機具が異っている。従って骨折の時は整復師に患者は治療を受ける習慣があり名倉治療院は有名であった。

当時大病院の外科として骨折や身体障害的患者を一括して取り扱うよりも整形外科と分離して一科を作ることには迫られ、大正七・八年頃に東京帝国大学では田代信徳教授が整形外科の一医局を分科したと聞いている。その二・三年後に慶応病院でも整形外科を独立し前田友助先生を主任教授とし、助教授として神田三井施療病院におられた桂秀三先生を配し運営されていた。外科主任教授は当時茂木先生であった。整形外科を独立させても適当な部屋がなく、外科助教授の佐藤太平先生の室に同居していた。此の室はレントゲン（藤波教授）室の近くで骨折患者達には便利であった事を記憶している。当時医局員は前田友助教授、桂秀三助教授、医局員は小坂慶夫講師、村上君（長崎医学）、関口君（日本医専）、藤田君（東京医専）、八木貞子女医（東京女子医専）であった。昭和二年に慶応卒業生として始めて五回生の亘、栃原、

山内の我々三人が入局した。看護婦長は佐々木婦長以下四人位であった様な気がする。医局員は皆学位を取るのが目的ではなく整形外科治療を勉強して開業目的の方が多く、従って診療が終れば医局員は夜の時間を楽しむ計画をしたり、雑談をして楽しい一時を過す事が多かった。小坂さんは前田教授より二つ年上だったから「おとつあん」、村上さんは頭髮が若いに似合わずうすかったので「ハゲマンさん」、藤田君は太っていたから「デブ」、女医の八木さんは「八木貞」と云い、これ等の名付親は皆関口君「おせきさん」であり、此のニックネームを皆親しく呼び合ったものである。当時、整形外科をおとづれる患者は、傾頸・併指・結核性関節炎・脊柱カリエス口蓋破裂・四肢の奇形ものが多く通院した。特に開放性骨折は名倉治療院では無理だと云って沢山の骨折患者が来院する様になり、前田友助教授は前田式骨折器まで発明した。此の方法はランボットの埋没金属接合を合理化して皮膚の外部から釘を打ち込む方法で骨折部を固定するもので、当時一大発見として評価された。

結核性脊柱カリエスにはギブスベツトでシャーレを作り、日光浴をさせる事が最良の方法であつて、結核患者の治療所を内科助教授の正木不如丘先生が、長野県富士見高原に日光浴専門病院を新設経営した。日本では始め

てのサナトリウムであつた。脊柱カリエスの多くは下腹部骨盤前に大きな膿瘍が形成され、其のpunkチオンも吾々の治療の一つであつた。前田友助教授の想い出の一つとして、手術時に助手がまごまごすると気短におこつたものだ。先生の此の習慣は東大の近藤次繁先生がそうであり、其のもとで医局員をした前田先生であつたからだと思う。桂先生は非常に温厚な先生で丸げぢやな方であつた。慶応病院の中に当時内科、外科、産婦人科、小児科の一大勢力をもつて居て、四大派閥を人事の上で形成していた。其の為に、若い実力者教授は批判的であつた。内科の正木助教授や前田友助教授は開業に踏切つた。そして昭和二年に夫々専任をやめたが、慶応としては後任者が来るまで在籍させて患者治療や学生の講義だけは数年継続させた。

整形外科教室では、年々患者もふえ社会的信用も厚くなつて来たので、前田友助教授の後任に前田和三郎教授が就任したわけである。私の在籍していた昭和二年頃、今から五十年前の看護婦の仕事は今からおおよそ大變な作業であつた。当時は包帯やガーゼは一反物で渡され、その綿布の両耳を四ミリ位裂いてとり、布を三列四列にたてぎきして、それを包帯巻器や手で巻いたものである。又ガーゼは四角に切つて使い、ギブス用にはガーゼをた

てに三つ切り、四つ切りに裂いて台の上でギブスの粉を適当につけて手作りの物をつかったのである。こうした事が看護婦の大きな仕事であった。次第に戦争も激しくなり、昭和二十年には病院焼失してしまった。再興する事に専念せざるを得ない。教授の定年制も敷かれ前田和三郎教授引退後、その後継者として私共同級生の解剖の谷口君や栃原君と相はかって脊柱の研究をしている外科の岩原君が適任である事を谷口君が教授会に提案して、後任は岩原寅猪君に決定したのである。其の後医局員も増加し整形の発展がめざましい活躍時代になった事は皆の努力の賜と信じているわけでありませう。

慶大整形外科

60年祭にあたり

臼 田 正 雄 (9)

私が慶応義塾大学医学部に入学したのは、昭和二年四月で、大正から昭和に改元されて間もない頃だった。従って、在学最高の四年生が第六回生であり、五回生迄は卒業して、大部分は夫れぞれの医局に入局され、勉強し

ておられた。

開校して滿五年が過ぎ、六年目と云うことであり、医学部も、大学病院もすっかり態勢が整って来た頃とも云えよう。即ち、医学部長には北里柴三郎先生を仰ぎ、主事には北島多一先生が居られ、基礎医学には解剖の岡島敬治先生、生理の加藤元一、薬物の阿部勝馬と新進気鋭の先生に、老練な照田豊医化学先生。又北里研究所からの秦佐八郎先生も居られた。臨床では内科の西野、外科茂木、婦人科川添、小児科唐沢、整形接骨科前田友助等々天下に名声を博して居られる方々ばかり、これ等の先生が張りきってやって居られ、誠に頼もしい限りであった。

この年生理学教室の大学院で学ばれた一回生の中沢恒三郎先輩が、本医学部の第一号医学博士として誕生し、我々の学問意慾をいやが上にも盛り上げられた。

現在、熟の代表的な歌になっている「若き血」はこの頃出来た歌で、作者堀内敬三さんが医学部に歌の指導に来られ、病理の階段教室で大いに声を張り上げて稽古したことを覚えている。

整形接骨科は教授前田友助先生のもとに桂秀之先生が助教授で居られた。

一年生の時、私の親戚の子供が先天性股関節脱臼で慶

応病院整形外科に入院した。当時数え年で六才、満四才。前田先生が大部整復に努力されたがはいらない。助助の巨利先生（五回生）がいろいろと試み、何とか入れて、皆で喜んだ一幕もあった。

当時の先股脱は診断の遅れもあり、又経済的關係もあり治療年令が高くなってしまつて大変だつたようである。三ヶ月ギブス固定。一応郷里に帰りその後又上京して、下宿をとつて半年以上もマッサージに通院したのであつて、相当の財力のある者でないと治療は不可能だつた。田を五升蒔（六〇〇坪）売らないと金が出なくて治療は出来ないと言われていた。

昭和三年四月二学年に進んだ。その四月六日の日記に「今日あたりは、生理の加藤元一先生は、京都大学に於ける日本生理学会で、神経伝導の不滅衰学説について大いに論じておられることであろう」とある。私達は一学年で解剖や解剖実習に励む傍ら、生理学も学んだ。この不滅衰学説は当時生理学界で、先生と弟子の論争と云うことで新聞種となる程争われており、新しい慶応から凄まじい嵐が吹き起つた時であつた。我々は生理の時間毎に、加藤先生の自信たつぷり得意満面と云つたお顔を拝しながら、名講義を拝聴したのであつた。

整形外科の講義は二年になつてからと思う。前田友

助先生がプリントを刷つて来られて、頭骨から上肢の骨へと、得意の手術の話をされた。勿論当時は、脳外科はなく頭蓋骨の問題である。上肢では、前腕の二本の骨を分けて指の代りにすると云う、突飛なお話が未だに耳に残っている。

かくてこれよりしばらくの後、前田友助教授と桂秀之助教授は相ついで辞任された。

前田和三郎先生は、その年昭和三年一二年着任され、教室を整形外科と改められた。そして或る日、あの大階段講堂で初講義をされたが、その時の情景がうつつらまぶたに残っている。其の後は本館二階の平面講堂だつた。何年の頃か、整形外科の教科書は前田先生の著書が唯一のものであり、先生も之に準じて講義されたように思う。

私と整形外科教室との関係は、昭和一五年四月、私が海軍軍医学校選科学生として、母校の大学院学生となり、前田和三郎教授のもとで整形外科の研修を命ぜられてからである。

其の当時の事情は、「ふるさと」六号岩原先生退職記念号に「思い出」として載せてあり、太平洋戦争勃発から戦時中の事情は「ふるさと」前田整形外科開講五〇周年記念号にのせてある。又実戦記事は「ふるさと」一号

に第二ソロモン海戦、二号に「ラバウル戦」について書いてあるから略します。

戦後のことは、教室におられた皆様方の御寄稿を期待致します。

終りにのぞみ、前田先生の御冥福を祈ると共に、岩原先生の御快復を祈念して 筆と致します。

近況報告

小泉次郎 (11)

同窓会誌の編集部の方々から御丁寧な御挨拶と、原稿依頼の御手紙を戴きました。

時々つまらぬものに雑文は書きながら、肝腎の「ふるさと」にご無沙汰をして申訳ありませんでした。

私は伊藤原同窓会長と一緒に、学生時代から特に親しくお付合いをして戴き、彼は何事によらず私の一目も二目も置く兄貴で、整形外科の教室でも十年近く、世話になりっぱなし、という有様でした。

その当時、前田教授、岩原助教授、畠中講師のほか、野崎、龍野、伊藤、長坂、大内、左奈田、加納、西平、

小柴、富田の皆さんと一回生の高木先生も加って標本室で、仲良く勉強をしたり猿談もし、時には野球、日曜日の近郊のハイキングなどで楽しく過した頃は、全く忘れ難い若き日の想出となってまるで昨日のような気が致します。

若くして亡くなった龍野、長坂の両氏に慎んで哀悼申し上げます。

同封の写真は、多分昭和一一年頃のものと思います。私の古いアルバムから剥したものです。岩原先生は、昔も今もあまり変わらないと思いましたが、流石にこの写真では、少々お若いようです。

整形外科一同の写真は、大変活気のあった「脊椎外科」の宿題担当時代の懐しいメンバーです。

何故か、人気者の西平君が見えませんが、鬼の霍乱だったのかも知れません。プレさん達の写真は、前列の三人の名前はわかりますが、あとは不詳です。

私は現在毎日午前だけ診療で、大体二〇名位の患者さんと細々ながら和氣藹々と過している、といった形です。その内に、群大整形外科にいてる長男がもう十年位になるでしょうから後をやってくれると思って待っています。

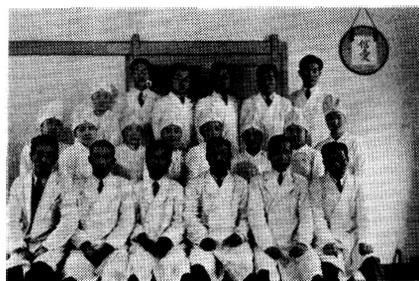
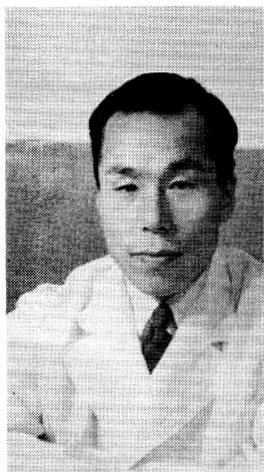
国立塩原温泉病院 時代の思い出

左奈田 幸 夫
(13)

私は昭和一七年六月から同二三年一〇月まで軍事保健院技官としてここにいた。それは故恩師前田和三郎先生から、温泉治療の整形外科研究のテーマを指示されたからである。

その一つに関節内温泉パンピング療法がある。その原理は従来の化学的滑膜切除術にあたるもので、関節内に化学物質を注入し滑膜表層細胞を凝固壊死させ、新しく滑膜再生を起させ改善する方法の応用である。この化学療法剤には種々あるが、注入後の多くは発熱、疼痛、腫張が著しいので、今日ではオスミウム酸が一般に用いられている。適応は変形性関節炎、慢性乃至水腫性関節炎に効果があり、慢性関節ロイマチスの薬剤無効例にも応用されている。

化学物質として温泉水を用いたのははじめての試みであった。塩原の塩釜、福渡地区の温泉水は、弱食塩泉で、ミネラルも副作用的因子のものは少なく、温泉の生理的活性化度も高いと推惟し、七五°C以上の源泉水を三七°C前



後まで自然下降させ、罹患膝関節に五、一〇ccを穿刺注入し三、四回パンピングを行った。術後排液して数日安静を守る。

温泉注入の作用機序として、前記オスミウム酸の作用もさることながら、次のことが推測される。温泉パンピング療法は、化学療法的作用があるが、あらゆる薬剤に抵抗した慢性関節炎に、温泉の生理的活性化度を利用した治療法であり、疼痛、発熱、腫張も少なくてすみ、時に著効をみることもある。

温泉活性化度を利用した治療法のもう一つの作用機序は慢性型から発赤、腫張という一旦急性型にもどして、そのまま治癒という経過をとらせることであり、滑膜層を再建再生することによって慢性化するのを防止することが可能となった。

これは戦争末期頃のことであったが、私は塩原に在る間に一命が助っている。それは二〇年三月九日の本所、深川の上空襲で、亀戸にある兄の病院が全滅したのである。当時部屋住みの私は教室にいれば当然この厄に会ったことであろう。恩師前田先生に感謝している。

心の「ふるさと」

小柴 清 定

(14)

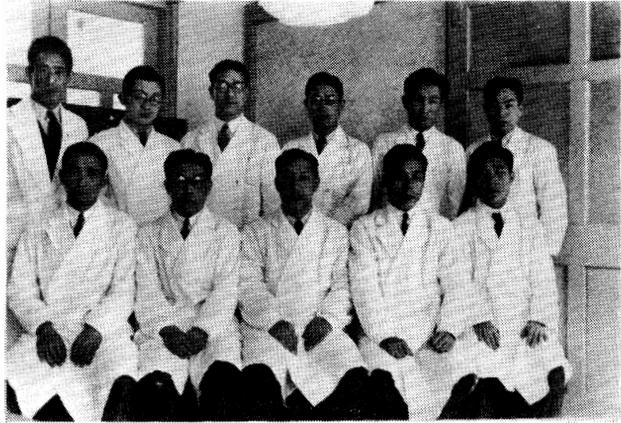
昭和十一年と云えば、教室開講六〇周年を迎えた今年から見れば、大分昔のこととなる。私が当教室に入局した年である。

当時は所謂戦前の時代で、自分の身を処理するにも先ず兵役を念頭において考えねばならない時勢であった。甲種合格なら勿論のこと、乙種合格でも、召集令状が舞い込めば何を着置いても、兵役義務を済まさねばならなかったのであった。

私は同級生の富田忠良君、加納保之君、西平賀健君の三人と共に新入局員になった。一年先輩の左奈田幸夫先生も一緒に入局だったので、都合五人となった。

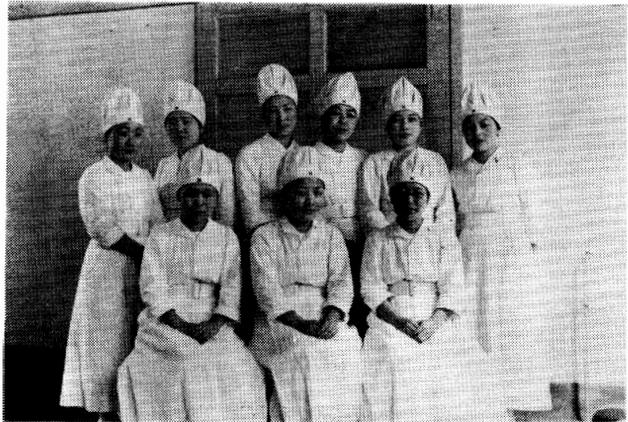
富田君一人が甲種合格で、入局後二ヶ月足らずで軍務に服した。入局して見ると、前年入局の蓮江信行先生も軍隊に征かれて不在であった。入局の翌月、外来診療室で撮った写真が見付かったのでお目に掛けよう。

前列の前田教授を中心に、岩原助教、畠中、野崎講師、伊藤先生、後列の水泉、大内両先生と、吾々新入局員の四五年前の若々しい様子を見て、感慨無量である。



同級の西平君の姿が欠けているが、多分彼がシャッターを切ったのであろう。当日、整形外科外来の看護婦一同も撮ってあった。

昭和十一年一五年頃在局した方々には、お馴みの顔もあろう。



当時の外来診療は正に在局全員のフル活動であった。

即ち初診と特殊再来患者は第一外来で、曜日を決めて前田教授、岩原助教授、島中、野崎講師が診療された。

伊藤、小泉、大内先輩が交互に第一外来のマネージメントをされていた。新入局員は、予診を終えると、第一外

来の助手を務めた。

再来患者を主とする「第二外来」は、ギブス室で行われ、大内先生が主役だったように記憶している。午後には、ギブス、処置室に早変わりするのであった。

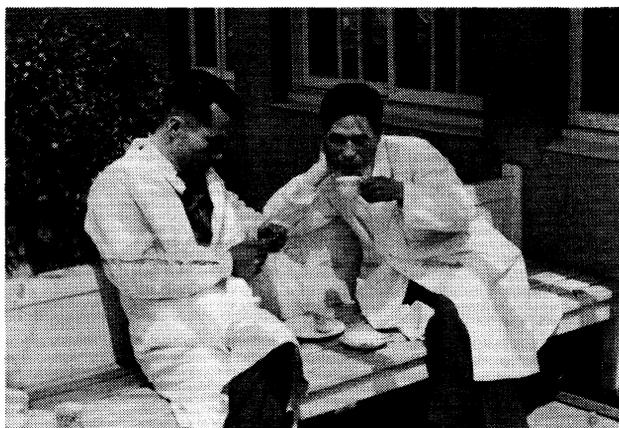
午前中の診療を終えると昼飯である。職員食堂はあったが、屋上三階に喫茶店があった。吾々はこれを「三階」と称していた。

若かった吾々には「三階」では量不足で、時には昼食を二度採ることもあった。然しそこには可愛らしいウェイトレスが笑顔を見せてくれるし、岩原助教授が「三階」のファンであった。屋上での岩原助教授と畠中講師の衣服振りも、この写真から御想像下さい。

今年の春、故前田教授の追悼会に招かれた。昔の先生方や看護婦さんに、久し振りで顔を合せることが出来た。小泉先生と「三階」の話に花を咲かせた。

午後は、手術、処置、ギブス等でそれぞれ時間一ぱいのフル廻転であった。今と異り先股脱も大きい子供の患者が多かった。整復、ギブス固定は前田教授が担当され、田村主任看護婦が、テキパキとギブスを差出していた様子が今でも想い出される。私は健側の「足持ち」をした後、ギブス切りをやった。

午後五時を過ぎ一日の診療が終ると、各自の研究時間



となる。研究室は二ヶ所あり、私は岩原助教授指導の屋
で、教授室の隣りであった。ここで仕事に取掛ると、ア
ッと云う間に時間が経つ。午後一〇時も近くなると整形
の当番看護婦が看護学生を伴い、夜の鍵番に廻って来る。

「先生、火の始末と鍵をお願いしますよ」

と云い、静まった廊下をコツコツと遠去かって行く。当時の看護学生の一人が、現在の田無病院の婦長である。奇遇でもあり、時々その頃の話が出る。

東京での整形外科集談会へは、私は緊張そのもので出席した。慶大が当番の時は、屢々、院内の階段教室で開かれた。定員一三〇人位の教室の前列に、せいぜい三〇名足らずが集った。母校以外は東大と慈恵大の方々であったと思う。私と同年に東大整形に入局の児玉俊夫先生も顔を見せて居られた。彼とは、後年同じ陸軍病院に召集され、三年半一緒に過した。彼も今は亡く、何となく淋しい次第である。

「十年一昔」と云われるが、昭和一一年は大分昔の部類に入ろう。私の記憶も、そろそろ霞の彼方に、ボヤケて来ている。

今、教室開講六〇周年記念号の「ふるさと」への寄稿を書き乍ら、故前田教授が命名された「ふるさと」の意を噛みしめている。

思い出すままに

久保宗人 (18)

私は昭和十五年四月に入局しましたが、前田先生から「加納君が苦勞しているから、晴嵐荘へ行って援助しなさい。」

といわれて、一言のもとに茨城県那珂郡村松村、今の東海村にある国立結核療養所村松晴嵐荘に赴任したのは同年六月一日でした。村松晴嵐荘では、前田先生御指導のもとに、加納先生は肺結核の外科治療に専念しておられましたので、私はそのもとで肺結核の外科をすることになったのですが、それが機縁になって、胸部外科で半生を過すことになったのです。それで整形外科で生活したのは二カ月にすぎなかったので思い出となることはあまりないのですが、思い出すままにいくつか書いてみます。

当時は整形外科教室は独立したものでなく、外科・整形外科教室といわれていました。それで、整形外科を志望した私たちは、外科と一緒に生活することが少なかつたのでした。宿直も一緒なら、新入局員の歓迎会も一緒でした。もっとも、新入局員の歓迎会は、後に整形

外科だけでもやってもらいました。宿直の時は勿論、宿直でない時も、夜は外科医局に行って、夜間の緊急患者の手術にたずさわることが楽しみでたむろして待機していたものでした。そんな時でもなければ、フレッシュマンが直接手術に手を出すことがなかなかできなかったからです。ある時、夜間にアッペの患者が来て、すぐ手術することに、手を洗わせてもらったのですが、ルムボールをやってみろといわれました。初めてのこと、穿刺しようとするのですがなかなかうまくゆかないので、だんだん焦ってきました。それをみて、術者の先生が替ってやられたのですが、これも数回やってやっとリコールが出たところで

「こうやってやるんだ。」

といってその針を抜いてしまい、また私にやらせたのでした。そんなことまでしなくてもよいのにと思いつながらまた穿刺をやったものでした。短期間で教室から外に出た私にとって、これもためになったとありがたく思っています。こうして外科医局にたむろしている間にいろいろ先輩の話が出たのですが、その中で

「大学を卒業して五年、十年とたつと、大ていのはマスターできて、何でも分ったように自惚減るようになるが、十年すぎ、十五年とたつと、分らないことがい

ろいろできてきて、俺はだめなのではないかと悲観的になってしまうことがある。それが二十年、二十五年をすぎると、俺の分らないことはプロフェッサーでも分らないということが分って、安心立命するものである。」

こうして外科と一緒にやってはいましたが、仕事の上では整形外科は独立したような恰好で、独自に活動していました。私が整形外科を志望したのは、大学を卒業する頃、どの医局に入ろうかと迷っていましたが、その時高橋先生が

「整形に來いよ。整形が一番勉強しているところだぞ。」といわれたことがきっかけですが、整形外科の先生がたは、皆よく勉強しておられました。今から考えると不思議なことですが、図書室へ行って本を読んでいたら

「フレッシュマンのくせに……。」
と文句をつけられたことがありましたが、整形外科では決してそのようなことはありませんでした。

昭和十五年という、日支事変が泥沼に足をつっこんだようになり、大東亜戦争が始まる前の年ですから、整形外科からも応召された先生も多く、岩原先生、伊藤先生、大内先生などが軍服姿で時どき教室にみえられました。軍隊口調で

「岩原中尉は……。」

といわれた岩原先生の姿が思い出されます。こうして整形外科は、前田先生以下、野崎、小泉、森田の三先生が中心になって、診療に研究に大忙しの時代でした。西先生もおられたような気がします。そのほか海軍から臼田先生が研修にこられ、中井先生それにフレッシュマンが数人という世帯だったと覚えていますが、昔のことではつきりしません。

整形外科の患者に小児がかなりいました。今でいう肢体不自由児などですが、診療のために長い間通院を余儀なくされるために、小児期の教育がゆるがせになるのを慮ったからでしょう、こうした子どものために幼稚園のようなものが作られていました。外来の前の廊下が突きあたる所に大きな部屋があって、そこで子どもらが遊戯などをしていました。もっとも、この部屋は今でいうリハビリ用の器具を置いてあったところですから、さむざむとした幼稚園(?)ではあったのですが、当時の整形外科の先生たちが、診療に来ている子どもへの教育にも意をつくされたということは頭のさがる思いがします。また脊椎カリエスも多かったようです。そのためにギブスベット作りが毎週くらいあったように思います。ギブスベットは来外診察室の隣にある処置室で作るのですが、

その頃のギブスは、ベットを作ったあと一週間くらい乾燥させなければ使えないというものですから、作ったギブスベットがいつも部屋の中で乾燥してあったものでした。化学療法がなかった頃の脊椎カリエスにしばしば合併した腸骨窩や側脊柱の膿瘍にたいしては、穿刺や切開排膿をするのですが、こうしたことは、結核療養所に行かされた私にとって随分ためになったものでした。四肢の骨折にたいしては牽引療法が行なわれていました。観血的な整復固定はみた覚えはありません。鎖骨骨折も観血的でなく、徒手整復をしてデゾーの包帯で固定したものでした。ギブス包帯をする時に「のみとり粉」を使ったのですが、今は見られない風景ではないでしょうか。椎弓切除術も一、二回あったと覚えていますが、教室員が少ない時でしたから、フレッシュマンの私たちも手を洗わせられました。持ちをするのですが、この手術の持ちが大変きつかったことを覚えています。その後村松晴嵐荘に行き、胸廓成形術の持ちで随分汗をかいたものですが、これと同じくらいにきつかったように思います。椎弓切除術のあとなどで、小泉先生がカルテに手術野の所見を彩色した図に描いておられました。すがすがしいものだったと覚えています。あの大きくウェーブがかかっている髪の毛をかきあげながら、ペンと色鉛筆

で手術野の所見を描いておられるのを、絵が下手な私は羨しく眺めていたものです。

前田先生は整形外科の主任教授でしたが、整形外科の領域をこえた分野にも手をつけられておられました。肺結核の外科もそうですが、私の在局中に脳の手術も行なわれました。脊髄外科をさらに脳外科へ推進されようと考えられたのでしょう。脳下垂体腫瘍の患者でしたがトレパナチオンに際して出血が多量にあり、手術にかなりの時間がかかりました。輸血などほとんど行なわれなかった時代であり、輸液もわずかなものでした。患者の状態が不良となった時、たまたま来ておられた軍服姿の岩原先生が私たちに

「はやくブドー糖を注射せんか。」

と叱咤されました。術後検討会が行なわれ、その席上トレパナチオンに時間がかかるのが問題だ。これを何とかしなければならぬ、など話しておられました。パイオニアという人たちは、いろいろ苦労するものだと思います。たった二カ月の在局中に、こうした経験を得たのは、当時としては格別なことであったとありがたく思っています。

整形外科はよくまとまっていきましたし、小さな世帯であったためもありましょう。私たちフレッシュマンはよ

くお世話をしていただきました。前田先生をはじめ、よき先輩の先生方に恵まれて幸福だったと思います。戦争中私も応召して外地へ行ったのですが、たまたま同じ所にいた海軍警備隊の軍医長が何かの話のついでに、自分が在籍している教室の教授を悪しざまに知っているのをききづらい思いできいたことがありました。それをききながら、私はよき教授、よき教室のもとにいることを誇りにさえ思ったことを忘れません。

整形外科の外来診察室の壁に、前田先生に贈られた「信愛」と書いてある色紙が額に入れてかかっています。この言葉は私のすきな言葉の一つで、数年前、看護学校を卒業してゆく者たちに色紙に何か書いてくれとせまれましたが、整形外科在局中の思い出とともに、「信愛」は私の信条の一つになっています。

みみず(蚯蚓)の たわごと(戯言)

岡 田 衛 生 (26)

慶大整形外科学教室が開講してより還暦を迎える「ふるさと」の六十周年記念号のめでたい企画に、時代の流れの一頁として、昭和二十年代に入局し、多事多難の風雪をすごして来た実情を、私に筆にせよとの幹事会よりの主旨と解し、指名打者の責任の一端を果すべく、且本年還暦を迎えた小生の筆不精のたわごととして御判読下さい。

現在の物資の豊富な時代に充実した生活を満喫されておられる大部分の諸兄弟には、戦後のないないづくしの医局生活にあけくれた報告は、実感として受けとり難いものと思われれます。

私の所持せる昭和二十四年発行の同窓会ニュース「二号」の教室だよりの記事によれば、小生等五名(今中、小林(録)、飛弾、瀬尾、岡田)の入局により、岩原寅猪教授、西新助助教授、久保義信講師兼医局長を中心に助手十三名の充実陣により、「宿題報告」「脊髄損傷の後症と後療法」(第22回日整会総会、於九大)の大任を多彩の裡に無事終了せりと記録されてある。

戦災被害よりたちなおりつつあった慶応病院も昭和二十三年十一月に木造の二階建新館落成し、ベット数四二〇と復活した。

整形外科の入院患者は平均四〇名、外来は平均一〇〇名であったが、入院患者の予約係は応接に頭を悩ませていた。当時の昼食風景は、二階の教授室に円陣をつくり夫々の愛妻弁当をひらき、教授自慢の新茶の供応が日課であった。

昭和二十五年四月一・二・三日に岩原教授の会長による第23回日本整形外科学会総会が別館、北里講堂にて開催された。我々助手一同は前日より会場づくり、パンフレット準備、ビラ貼りに深夜まで奔走し、オープンを心持ちした事はいうまでもない。

私の記憶によると、二日目の庶務会計報告の折、岩原会長は壇上に日本地図を掲げて、整形外科学会会員の分布状況を図上に日の丸の小旗のピンで示し、登録会員約六〇〇と報告されたと思われる。当時の学会々費は三〇〇円(前年値上げにより)で会費未納者が半数を占めていて赤字に苦しんでいると報じられた。

総会が無事終了し、慰労会の席上で早々と昭和二十六年四月に発表する協同研究「骨折の牽引療法」の分担が我々助手に課せられた。

動物実験が主体である。当時の家兎、犬の飼育小屋とは名ばかりで、飼育の一切即ち餌の徴発やら管理は自身が担当であり、実験成績の向上のために、各病棟の配膳室に貼紙して、高カロリー残飯の確保や、背負籠をしょって夕刻、外苑絵画館裏へ草刈りに出かけ、乾草作製にと実のどかながら、きびしいものであった。

病理組織標本作製にても用度課へ五リットル瓶をかかえて固定用のアルコールの配給を受けにゆき、病理用メスも各自で研ぎ、大切片のツエロイジン包埋固定に心血をそそいでたたかった。かくして担当の至適牽引の病理組織学的研究等の演題は、昭和二十七年四月第25回日整会総会（大阪）にて発表し一応の完結をみて、桜花爛満の中の島公会堂にて祝盃をあげた。

今にして回顧すれば三十年余の才月は短いものの、医学の進歩はめざましく、殊に手術内容の変遷が印象深く感じられます。私は日本鋼管病院、立川共済病院、大田原赤十字病院（本年四月四〇〇床に増改築す）とめぐり、多数新進の同窓会諸姉と交遊を深め、新しい学問を見聞し得、趣味の和歌、俳句、仏会話をききかじり、無病息災にて今日まで過し居る事を幸福に思っております。終りにのぞみ、泉田重雄教授の学会々長による日本整形外科学会を主催する日の到来を千秋の思いで期待して居

る一人です。

「戲言雑感」

温古知新燃心魂
卒後整形三十年
奉仕県医赤十字
内遊幾度求見聞
果夢改築四百床
満堂拍手響心底
無病息災滅煩惱
今迎還曆如夢想
余生俳諧興佛語

信濃町の医局の思い出より

春日秀彦

(28)

私が入局した昭和二十五年の医局は別館の三階で、現在の医局の真下にあった。中央のテーブルを囲んで教授からフレッシュマン迄坐れる人数である。岩原教授の外來でベシユライバーをやると「ルンプをホイゲンすれば

シュタイフのハルトウングをとる。〇〇ヴィルベル、ク
ロップエンピンドウリッヒ……」をしばしば書いたもの
である。教授廻診には、西助教授以下全員が従い、担当
患者の番が来てヘマをやる、こっぴどく叱られるので
緊張の連続である。先天股脱のギブスマきは教授で、池
田医局長と泉田先生があし持ち、我々は泥を塗らせても
らうのがせいぜいであった。ギブス切りはひと苦勞で、
ギブス刀を研ぐことも仕事である。抄読会では、どんな
ものを選ぶかが問題である。というのは、つまらないと
教授が新聞を読み始め、後で酷評されるからだ。週一回
の会食では、教授を中に三役が窓側、我々は入口側に坐
る。奥様手作りのお弁当を、おいしそうに召上りながら
教授は、岩原農園のスイカの出来工具などの話を楽しそ
うにされる。池田医局長は火災放射器で戦車を焼いた話
など。西助教授は、終始にこにこして相槌を打って居ら
れ、泉田先生は口数少なく、田中先生は次々と面白い事
を喋っては皆を笑わせ、おかげで我々は助かった。医局
員は二十回から二十八回生、専門部の人達、他校からの
先生方。それに開業中の年配の先生も居られた。私の臨
床面でのライターは森田盛録先生、研究面でのライター
は永井隆先生で、永井先生には、その他の面でも特別指
導を受けた。当時の方は推測可能。入局三カ月後に教授

からハウプトテーマを与えられ研究室入りをした。西助
教授を主とする結核研究班の外に、池田先生、その他数
人の先輩、同僚で研究室は何時も混んでいた。私が顕微
鏡を使えるのは大低夜中の二時頃からで、それから午前
四時頃迄夢中でのぞき、医局のテーブルや長椅子に寝る
事がしばしばであった。そんな或る晩のこと。ナイトプ
ロフェッサーの〇〇先生が、「おい、顕微鏡あいたぞ、
俺、先に寝るからナ。」と研究室を出て行った。しばら
くしてひょと床を見ると財布が落ちていたので、誰の
ものか確かめようと開けてみた。幾らも入っていないが、
妙なものがある。指サックかと思っではめてみたが太過
ぎる。風船？と思ってふくらませたら、手が滑って、シ
ューツと室の隅に飛んで行ってしまった。恐らくフォル
マリンの大ビンのうしろへでも入ってしまったのだろう。
エッ、財布？ 勿論返したけれど、中味のことは聞かれ
ずに済んだ次第。あの物は今更お返しするわけにも行か
ず、お返ししても役に立つかどうか。〇〇先生、あの犯
人は私ですが、もう時効です。ところで、実験動物に兎
を使っている連中は当番制で、小林、瀬尾両先生を始め
皆で、ブーブー言いながらキャベツを刻んだり、糞尿の
世話をしたり、結構面白かった。動物の世話から標本作
成、所見の判断まで何でも自分でやるのが岩原教授の指

導方針で、ラボランチンを雇う話が出た時は、真向うから反対され怒られたものである。私は医学部二年の頃から病理学教室に入入りして、解剖の助手や、組織標本作成などやっていたので、これが非常に役立った。

教授は多少こわくもあつたが、個人的な面もよく見て下さった。「春日君、ほら、少しだがお小遣いが入ったよ。」と初めてのネーベルの雑誌掲載料を手渡された時は嬉しかった。我々が大学からもうのは、正月の餅代二百円だけだったから。また、「おめでどう論文パスしたぞ！」と医局へ入って来られるなり大声をかけて下さったりもした。ハウプトに、自分でやったネーベン五つを、ぐずぐずせずに提出するよう強く言われ、今のうちにコピーが簡単に出来ない時代なので、一日三十分しか眠らず、六つの論文を夫々三部づつ計十八部を手書きし、新品のパーカーを漬し、一週後に提出した。教授が呆れて、どうやってこれを書いた、と聞かれるので、一週間勤務を休んだ旨を述べたら、公務員が務めを休むようではいかん、と言われながらもニヤリとされた。その頃、私は村山病院におり、夕方（早い時は午後）から夜中の三時迄研究室で過していた。正月の休みで私の留守中に村山の独身寮が焼けたが、幸い教授が貸して下さったマンデルシュタムだったかの原著は燃えずに済んでは

つとした。

私が学生時代、泉田先生が黒板消しやチョーク拾いをしておられたのを見て、気の毒に、と思ったりしたが、私もそれをやらされ、村山へ行った後もちよいちよい信濃町に来て、教授の外來、廻診、臨床講義などに顔を出し、学生の前で、諸君、この男はカリエスを勉強しとるが、今ではもう結核は激減した……とやられた事もあつた。

村山から、東二、稲城と移ったが、ある日、教授長屋の入口のトイレでシャアシャアやっていると、左隣りで始めた人がいる。ひよいと見ると、アッ、岩原先生！砲列を敷きながら先生曰く、「岩原、今日あるは〇〇先生が岩原にチャンスを与えてくれたお陰である。今日、岩原は君にチャンスを与えよう。後で私の部屋に来なさい。……というわけで、水戸に来てしまった。それからもう十八年余になるが、未だに先生の与えて下さったチャンスを、ものにしていないと申し訳なく思っている。学生時代に聞いた西助教授の講義で、「私なんかの頭はもう固まってしまって、良い考えが浮ばないが、学生諸君の頭は柔らかだから、どんどん新しい事が出来る……」との言葉は忘れることが出来ず、私共の、こども福祉医療センターに来るPT、OT、保母の研修生に話して

聞かせている。

過去をふり返れば、珍事、変事は山程あるが、紙数の関係で、今回は母校の医局時代を主として述べた。

大学の医局は教授を中心に、臨床、研究に励み、雑音に迷わず、学問専一と心掛ける所と、私は思っている。

医局の皆さん、健康に留意し、明るく、楽しく、勉強に専念して下さい。私が過した時代の医局のように、

名も無く豊かに面白く

藤原 由利夫

(29)

医局を出て埼玉、東京と歩き今の病院に来て丁度五年になる。昭和三十二年、先づ振り出しの社会保険埼玉中央病院に十三年勤める。当時この病院は僅か一〇〇床、木造のオンボロ病院であったが院長以下力を合わせ県の基幹病院となるべく努力した。泉田当時講師の直接の指導を頂き私も整形外科医として自力がついた時であり、今から思えば最も充実した時代でもあった。院長の方針でもあり院外の公的な仕事、市医師会の諸行事にも積極的に参加し多忙ながらも楽しく有益に過した。一ヶ月間

の外遊もさせて貰った。しかし、四十四年胃潰瘍等の理由で自宅に近い同系の社保都南総合病院に転動した。大井町にある一六〇床の病院である。この病院は医局とは無関係で自らの意志で移り代ったのであるが、入ってみて同系の病院でありながら、その内情の違いに驚いた。二、三の科を除いて全くあきれ程の怠慢ぶりである。無能、無気力な医師が要所を占め病院全体を牛耳っているのである。手のかかる患者や重症例は口実や難癖をつけて入院させない。自分の夜間開業の方に力を向けるための患者不在の診療（三科の部長）など近所の評判もよくない。躍進の埼玉中央病院に比べ怠惰赤字の都南病院は童話にある蟻とキリギリスの違いがあり、それでいて月給は変わらないのである。又、学閥の無い寄り合い世帯の難かしさも知った。埼玉は慶応閥であり先輩は威張っていたが、それなりに親しみもあり整まりも良かった。全体がしっかりしていた為か、少々の悪は居てもその影響は目立たなかった。ところが都南ではそうは行かない。上下の隔ては無いが整まりは極めて悪く、迂闊にものを云うと他校批判になりかねない。医局長を仰せつかった時、院長と画り、ブラ勤を改めさせようとして、却ってひどい仕返しに合ったこともある。出る釘は良くとも打たれ、悪の守りは確いものだと痛感した。折角来た生れ

故郷の病院であったが、得たものは五年間の都支払基金の体験だけ、数年もたたぬ間に嫌気がさして来た。こんな頃、今の高崎の病院から誘いがあった。先輩や友人から「何も都落ちまでして高崎くんだりまで行かなくともよいのに」、「俺の病院え来ないか」などの忠告やお心遣いを頂いたが高崎え行くことに決心した。この前後、傷心の私に対し、社保本部や先輩から院長、副院長の転勤のお話しを頂いたが、これは自信がないのでお断わりした。私にとっては過分の人事であり嬉しかったが、大袈裟に言えば対人関係に嫌気をさし個人病院に逃避したとでもいえよう。

さて、今の野口病院は高崎市の西北部、ひと駅軽井沢寄りの北高崎駅の近くにある。病床数六八、職員数六〇、救急医療に力を入れている。常勤医は院長（三一回生）と私、あとは群大の外科・脳外科から毎日パート医の応援を得てやっている。年間の手術数は整形が約二〇〇、外科が一〇〇。リハビリの設備はなかなかのものである。私は週休二日制で日、水曜は休み、月、火、金、土の四日勤務する。木曜日は永寿病院え行き、伊藤元形成教授、小川学兄、医局から出張の先生方の御高説を拝聴して頭の体操をしている。大井駅から高崎えの通勤の片道二時間半は意外と楽しい。高崎線の一時間半は読もうと、眠

ろうと、考えようと、その時の頭の都合で不足を補うのに丁度よい時間である。帰りにわざわざひと列車遅らせて駅前一杯やるのも楽しみ。勤務の日は近くのマンションに泊る。家族達はたまここに泊りに来るのを楽しみにしている。若し東海大地震で大井の家が壊われればここに移る心算でもある。東京から病院とマンションの間をひたすら往復するだけなので昼間の高崎は余り知らないが、夜の方は詳しい。今迄に百軒近くの飲み屋に税金を振って来た。車の運転も出来ず、好きだったスポーツもしなくなり専ら液体を楽しんでいる。汗水流した後飲酒なら身体に害は無いと信じてやって来たが近頃はDMが高じ昔日の勢はそがれ気味だ。それにしても高崎から見る山の景色は素晴らしい。北側は眼下に榛名山麓が緩やかに拡がり相馬ヶ原へ、南側は観音山を隔てて裏秩父連山に連っている。眼前に榛名、赤城、妙義の上毛三山が一望の中に展開され、その山あいの遠くに雪を戴いた浅間山、谷川、南アルプスが四季の景色をのぞかせる。ほろ酔いで唄う“名月赤城山”はここでしか味わえない。本場の味か。すぐ旁には榛名湖からの烏川と碓氷川が流れ東京にはない環境の良さは私の心を和ませてくれる。そして何よりも大病院に於けるような本業以外の煩らわしさもなく仕事に打ち込めること、衆目の期待が

一身に集まっていることにやりがいを感じている。ただ地元の医師会の人々との交流の無いことは淋しい。せめて群馬慶整会（仮称）の先生方でもお話しが出来ればと思っている。

医大が増え医師の過剰時代が来ようとし、都市の有名病院勤務も、開業も思うにまかせなくなるようだ。そこへ医療訴訟問題が加わり診療もやりにくくなった。大病院に永年居れば誰でも院長、副院長を夢見るだろうが、うっかり偉くなって管理者側になれば労働功勢でノイローゼになりそう。

私は二〇年間都会の総合病院に勤めたので、これからは格を選ぶより内容で行こうと思ひ、請われるままに高崎に行くことにした。月火、金土の週四日の勤めは非常に忙しく実働四〇時間に及ぶが、翌日は休めるようにしてある。患者や周囲から結構頼られていると自負している。一国一城の主となって奮戦している方から見れば他方本願の変り者との御批判もあるが、「名も無く豊かに面白く」行こうと云う次第である。子供が成人し、私がか六〇才を過ぎたらもっと奥地へ行こうかと思っている。私と妻のフィナーレである。それから先は子に従がおうかと思っている。

この手記が皆様のお目にとまる頃、高崎に上越新幹線

が開通するでしょう。美人は少ないですが、ハートナイフで働き者の女性でも、にどうぞお立ち寄り下さい。

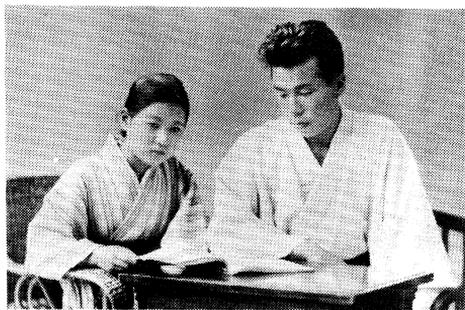
「越の寒梅」など全国の銘酒が豊富です。関越高速道路高崎インターから一八号国道に入る少し手前の左側にあります。

岩原先生の思い出

奥村守彦（特）

岩原名誉教授と私の兄（サンパウロで三〇数年前胃癌で没）と同期生で、学生時代は家族ぐるみのおつきあいを戴き、先生はその頃から私の母を大変尊敬して下さいました。そのような関係から岩原先生の御新婚当分の、このような古き良き時代のホットな御写真や、山がお好きで山岳部にいらしたのでしょうか北海道、大雪山、信州、アルプスの山と思われる登山姿のお写真が、私の家の古いアルバムに残っております。いづれも昭和初代の頃のものが多いのですが、その頃は私の家は北海道旭川市近くの農村にあり、有名な層雲峡にも近く、石狩川

したから、先生の学生時代、幾度か夏休み冬休みを利用して登山のため北海道へおいで戴いたのではないかと思われます。私はその頃は確か幼児であった筈ですから、その頃の思い出は何一つさだかではありませんが、先生や兄の膝の上のせられて、チビをひやかされ乍ら可愛がって下さったことだけは妙にはっきりと覚えております。これから二〇年以上たって、先生の教室でお世話になるなどとは夢にも思いませんでした。御縁があつて先生のおかげで教室にお世話になり、いろいろ御指導をうけたのですが、先生は教室では勿論きびしい先生でいらつしやりました。同窓生がよく云われる「こわい」先生という印象は私にはなく「叱られた」という印象もありません。私には「めんこい仔馬」の優しい慈眼のみが強く心にやきつかれています。先生のこのようなお写真を先生に断りなしで掲載して、それこそ「お叱り」を受けらかなと心配しますが、現在御病氣御療養中の先生が、この写真を御覧になつて、お若い頃を思い出され、昔のままのお元氣な先生に一日も早くなつて戴きたいと思ひ「ふるさと」に、のせて戴いた次第です。



医局のころのボク

富田 恭弘 (37)

昭和三十三年の卒業だから、翌年の三十四年に教室に入局したことになる。それから約一〇年、ずぶの素人に近い者をどうやら医者らしいものにしてもらえたのは、教室のおかげである。

だれでも、自分の存局の時代が、一番活気があり、人材もそろっていたと思いがちだろうが、僕の場合、文字どおりの、黄金時代だったように思える。その証拠に、ある時代の医局から、教授が三名でているし（まだ教授になりそうなものもいるし）助教授、講師にいたっては、十指に余まる。

今でもそうかもしれないが、あの頃の外来は、午後一時二時になることがざらだった。朝から、ベラユライベんでついていると腹がへって、腹がへって弱った。ある日、ふと隣りの矢部さん（現名古屋保健衛生大学教授）を見ると、口を働かしている。ハテ外来には喰物はないはずだと「矢部さん、何食べてんの？」と聞くと「糖衣錠の甘いところだけ、なめてんだよ、少しは血糖値が昇るだろう」、そこで二人して外来にあるサンプルの、糖衣

錠をなめては仕事をし、仕事をしては、もう一寸でなくなる前に糖衣錠をはき出していた。

今外来にある「紹介患者結果報告書在中」というなんとなく、真面目みたいな、不真面目みたいなスタンプは、やはり外来番の時、僕と伊川先生（現柏中央病院々長）と相談して造らせたものだ。

紹介状の返事入りの封筒に、あれを音高く押して、なんとなくウサをはらしていたのだ。

慶応からの返事封筒に、あれがおしてあると「なるべく、コケおどかしの造ろうや」と、二人で相談していた時代が思い出されてなつかしい。

お中元、お歳暮の頃は、医局にビールが山積みされる。大きなヤカンに氷を入れてビールを何本も注ぎ込んでのむ。ツマミは地下の売店から、いわゆる「カワキモノ」たいしたことはない。

氷を病棟から盗んで来るのは、フレッシュマンの仕事だった。僕は医学部の演劇部に居たから、芝居をする必要上病院のどこに何があるか精通していた（芝居の小道具を買う金がないから、上演の間だけ、一寸お借りした）よく盗みに行かされた。

医局やさがしたって、車をもっているのは二人位しかいなかったから、みんなおそく迄のんで、しゃべって

た。一寸した手術のコツとか、患者の扱い方等は、その時
 時間いたものが、少なくない。

車といえば、医局から母に電話して「車を買ってくれ」
 とせびって、最後に「だって、みんな持ってるだよ」と、
 おさだまりの科白を使っていたら、今井先生（現東海大
 学教授）に、「君は、いつまでも子供みたいなこという
 人だね」と笑われたり、感心されたりした。

茨城の「ひばり学園」へ、出張しろといわれた。丁度
 アルバイトも終わっていたので、医局としては問題のない
 人事だったのだろう。しかし、ズーっと地方まわりだっ
 たので、今回こそは、お膝下と思っていた。僕には大い
 に不満だった。矢部さんが医局長なりたての時、二人で
 さかんに議論（？）した。その頃の医局にいわれたこと
 「富田先生とかけて、林与一と解く」。そのころは「
 「ひばりに好かれて困っている」、林与一と美空ひばり
 が、平凡やら明星にさわがれていた時だった。結局体制
 に負けてか、僕は「ひばり」へ出張した。もっとも、そ
 のおかげで、肢体不自由児に関心を持つようになり、横
 浜市の肢体不自由児の仕事も、このところ十何年やって
 いる。

医局のこのホク



私のふるさと

花岡英弥

(37)

この春、武見太郎会長に代って、日本医師会長に、花
 岡堅而長野県医師会長が選ばれた。その後、暫くの間は、

今度選ばれた花岡日本医師会長は親類かとしばしば質問された。

違うと答えると、事情通の方は「先生も長野県なのでそうかと思った」と言われた。

確かに流行の言葉であるルーッ的に言えば、私の父は上諏訪の対岸の寒村、諏訪郡湊村（現在は岡谷市湊）の出身である。母も岡谷市の出身であり、現在も父方の伯母や母方の叔父、叔母、従兄弟が諏訪地方に住んでおり、兄も今は上諏訪に住んでいるので、表面的に、或は戸籍上は長野県出身と言うことになる。

しかし、私自身は終戦直前の七月、九州で焼け出された後、父のみ残して、母の実家の岡谷へ疎開し、十一月までの四ヶ月余り住んだに過ぎない。その後は、時折、訪れる程度である。

父の生家も疎開の頃、初めて訪れ、その後二、三度立ち寄ったことがあるのみである。諏訪湖の西側の丘陵に段々島が連なり、湖畔に近い道から暫く登った中腹にある平均的な田舎の家であった。山からの清水が勝手口に近い外の洗い場まで竹の樋で引いてあった。

十分程、東に歩いた所に村の観音堂が太い杉の木に囲まれてあり、その小高い丘からは諏訪盆地や霧ヶ峯が見渡せた。

武田信玄に一旦は亡ばされた諏訪氏の娘、由布姫は信玄の側室とさせられ、勝頼を生む。その由布姫が、勝頼死後、この観音堂に籠って一生を終えたとかで、数年前、訪れた時には、井上靖による由布姫謂れの碑が立っていた。

この観音堂の少し手前を湖水と反対に山の方へ少し行った所に、人家の殆どない山の斜面を切り開いて作った二百坪足らずの墓地があり、石碑や新しい卒塔婆や地蔵が並んでいた。その多くに自分の知らない花岡云々との俗名が刻まれており、それに混って昭和十二年大牟田市で水道水から発生した爆発赤到（疫学で有名）で死んだ弟の地蔵もあった。初めて、この墓地を訪れた時、ふと自分も死んだらここに眠るのかなと思った。住んだ事もなく、僅かに本籍だけの関係しかない私には、恐らくここに眠る資格はないが、父は死んだらこの墓地に墓を作ってもらいたいと望んでいる。

今は村ではなくなったが、旧湊村を歩くと花岡の表札の懸っている家が目につく。尤も私自身とどのような繋がりがあるのか一向に知らない。当時も母に連れられ、ここが新家だとか言われながら知らない遠縁の家を廻った覚えがある。

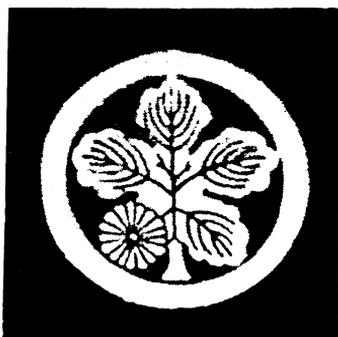
以前、伯父に氏姓の謂を書いた本を見せられた時、花

岡氏の項に次のように書いてあった事を覚えている。

花岡氏、諏訪と紀州に多し。諏訪の花岡は諏訪上社神家の一つの有賀氏より別る。

紀州の花岡には華岡も有り言々……

そのためか、家紋も諏訪神社や諏訪氏の紋である穀（カジ）の葉に手を加え、五つある葉の一つの所に菊が重ねられた紋となっている。



戦国時代の名残の、

出城のような小城、花岡城跡が現在花岡公園となって、村の西の端の諏訪湖が天龍川へ変って行く水門脇にあるが、江戸時代には既に農民となっていたようで、再興された諏訪氏の

家臣には花岡氏はない。

昨年、東京の戸山高校同窓会総会の折、新卒の中に花岡と言う子がおり、向うから同姓ですねと声を掛けて来た。出身はと尋ねると自分は東京育ちだけれど父は岡谷市湊ですと。家紋はと尋ねると、五つある木の葉の一つ

が菊になった紋だと答えた。それでは、昔はどこかで繋りがあったのだろうと笑ったのであるが、今度の花岡日本医師会長の紋がどういうものかは未だ知らない。同氏は長野市在住らしいが、長野県下の各地の花岡氏は恐らく狭い諏訪盆地から峠を越えて行ったものではないかと思う。丁度、父の男兄弟が皆、郷里を離れて、千葉や東京へ散ったように、遠い過去においてそうしたのではなからうか。

今まで花岡の姓の者で全国的な知名人はいなかった。戦国時代のこと、郷土史に、高遠氏（高遠）や小笠原氏（松本）と共に武田信玄に反抗して敗れると簡単な記載があるのみで、歴史的にも紀州の華岡青洲が知られているだけである。それだけに、今回の花岡日本医師会長は、耳新しく響いたようである。

父や伯父達は、諏訪湖畔を一時半程歩いて、諏訪中学へ通ったという。また、冬になると凍った湖水をスケートで通学したこともあるという。中学から帰ると畑やかいこの世話をさせられ、低学年の頃は疲れて眠くなり、あまり勉強できなかったと父は、時折、昔話をした。父にとっては、確かに、諏訪はふるさとであるが、私にとっては、私のルーツではあれ、ふるさとと言う名にはほど遠い。

勿論、父の郷里として、自分のルーツとしての愛着は大いに感じるのであるが。

このような私に、自分のふるさととは、生れ育った九州なのだなあと改めて感じさせたのは、一昨年、久留米での日整会総会の折であった。学会の合間を抜って、大牟田を訪れ、中学、高校時代の大半を過ごした三池高校の門を三十年振りに潜り、旧師の一人に会ったり、市内では英語塾を開いている旧友や菓子店を経営している友と会った。小学校や、物どころについて以来、上京するまでの十三、四年間住んでいた社宅も訪れた。

高校や小学校の校舎は新しくなり、私の学んだ頃のものとは違っているが、校庭のそこに立つと、若かりし頃のさまざまのことが思い出されて来た。斜陽の炭鉱を抱え、人口は当時より減少しているとかで、街中のビルも久留米より少ないが、それでも狭かった道幅が拡げられ、様子がかなり変っていた。しかし、基本的な道そのものは昔のまま走っていた。また、社宅の門や塀が新しくなり、玄関のドアがアルミに変ってはいしたが、全体としてのたゞまいは殆ど変わっていなかった。かつて、陣取り、隠れんぼ、石蹴り、こま遊びなどをした社宅内の広場には、小さな子供を遊ばせている若い母親達が見られた。社宅のどの家も住む人が変わり、折から満開の花をつけた

社宅の土手の桜をみながら、中学時代に習った時には、実感がわかなかった漢詩、

年々歳々花相似
歳々年々人不同

とは、正にこれだと感じた次第である。

夜は、菓子店をしている森君が一席設けてくれ、有明海でとれるマジック、オコゼ、ワタリガニなどを食べながら、旧師、旧友と昔の思い出を語っているうちに、記憶も徐々に甦って

来、楽しい一夜を過すことができた。

小学校は、大牟

田市立第七小学校

↓第七国民学校↓

不知火小学校と戦

前から戦後へかけて

三度名前が変わっ

た。九州の中都市

の一小学校に学ん

だが、わが整形

外科学教室窓に

三人もいることは

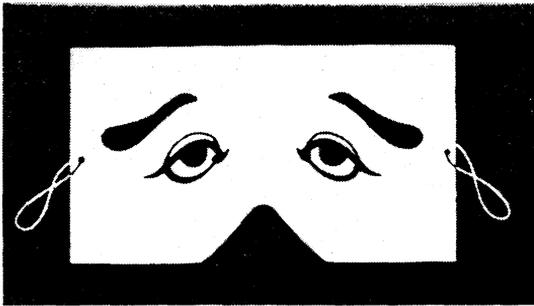


稀らしいことであろう。三人とは、野間千賀子先生、村尾先生と私である。村尾先生は私より一級上で兄と同級でもあり、丁目は違ったが同じ町内でもあったので子供の頃からよく知っていた。野間先生は担任だった猿渡先生と今でも親しくされているとの由である。また、バレーリーナの貝谷八百子も同じ小学校に学んだという。彼女の住んでいたという家は、当時は社宅から道を狭んだ高い石垣の上に立っていた。

この小学校には、かつては三井系諸会社のホワイトカラーの子弟が多く通っていた。驛から七、八分という街中にあり、周辺に商店や事務所が増えたり、会社が斜陽化したり、或は、昔と違って単身赴任が増えたりして生徒数が減り、満六〇年を迎えた今年限りで廃校となった隣の小学校と表面对等合併、実質合併吸収されることになった由（トヨタ自販の合併みたい）で、一抹の寂しさを感じている。

妻の妹一家が三年前より福岡へ転動したこともあって、今年春の福岡の学会の際には、妻も同伴し、柳川を訪れたり、再び大牟田を訪れたりした。福岡では九大医学部を卒業して福岡や小倉で開業などをしている三池の旧友三人がそれぞれ奥さん同伴で集まってくれ、一夕を共にすることができた。

九州にいた頃は、地元の方言と久留米弁、博多弁、熊本弁との細かな違いが識別できたが、今は細かくは識別できなくなった。それでも、昨年からの初めまで朝日新聞に連載された遠藤周作の小説「女の一生」の中の長崎弁は大いに楽しめた。義妹の子供たちは僅か三年の間ですっかり博多弁となり、「なしてそげんことすつと」などと話しているので、私が昔を思い出しながら「ばってん、よかたい」と言うとい瞬、怪訝そうな顔をしながら嬉しそうに笑った。



二の加剪餅

たいらぎ（貝柱）の粕漬、高菜、旧友の菓子店のかす
てら万頭は子供の時から食べ馴れた大牟田の味であり、
その他、熊本の朝鮮飴、博多の鶏卵素麺、鶴の子、二
わ加煎餅、唐津の松浦漬なども懐しい味で、デパートで
九州物産店が開かれていると、自分で買ったたり、妻に買
ってこさせたりはしていたが、永い間、訪れることもな
く、半ば忘却の彼方にあつた九州の生れ育つた土地を訪
れ、強い郷愁を感じるといふことは、それだけ年取つた
証拠といえよう。

椎間板ヘルニア始末記

石名田 洋 一
(40)

昭和五十三和五月に椎間板ヘルニアの手術を受けた。
あれから四年が過ぎ去つた。当時を振り返ってみるのも
一興と思ひ駄文を草した。悪しからずおつきあひいただ
きたい。

昭和三十三年三田綱町の道場へ柔道の練習に行ったの
がそもそものはじまりで、腰痛と左イシアスが或る日急
激に悪化した。このため直立することができず、学二の

（寄生虫の実習に這うように出席したのを覚えている。二
○才を過ぎて突然柔道のような荒っぽいことはするもの
ではないと今でも思っている。腰痛は軽くなつたが下肢
ことに腓骨神経領域のいたみがとれないため整形外科を
受診（勿論慶応病院の）したところ、○脚と扁平足の
せいにされたのも今から考えると幸運であつたかもしれ
ない。何故ならば、当時ヘルニアの診断がつけば、椎弓
切除は必至であつたと考えられるからである。二ヶ月も
すると自然にいたみは遠のき、以後一〇年間はゴルフや
ボーリング等も可能でほとんど忘れるようになっていた。
昭和四十三年当時東電病院で猿の実験と称しながら卓球
を盛んに行つていた所、突然再びある猛烈な左イシアス
が発来した。結婚式を間近に控えていたため、山口義臣
先生の御好意により入院、骨盤牽引、絶対安静を守つた
が、ラセグーがなかなかとれないためマイオジュールミエ
ログラフィーを行つた。幸いにも特別な圧迫所見は認め
られず、牽引を続行し、式の前日によく退院するとい
う状態であつた。以後、年に一―二回いたみがあり、
それが一―二週間続くといった成書記載通りの状態が日
常となつた。

五十三年春、いたみはさほどひどくないが、左下肢が
重く、院内回診がめんどうになつた。腰痛だけならば何

とかがまんでできるが下肢痛やシビレ感は気分がめいって
くるようでないやなものである。こうした生活に耐えられ
なくなつて、手術的治療を考慮し再びミニログラフィー
を行つてみた。今回も硬膜管には明らかな異常はないも
のの、L₅-S₁間にて左側、S₁根の欠損が認められた。単純
X線像では一〇年間にL₅-S₁間が明らかに狭小化してい
た。症状の電解を繰り返すのは、L₅-S₁間ヘルニアのこ
とが多いとの記載になるほどと感心したら、水溶性造影
剤の偉力に驚いたりした。

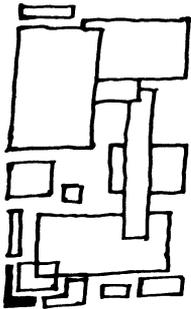
当時私の下にいた市原先生に術者を文先生に助手をお
ねがひした所心よく引きうけて呉れたので、Love 法で
手術をした。こちらはねていれればいいが行う方は大変だ
つたろうと思う。麻酔が醒めた時両大腿と下腿から足背
にかけてシビレがあるのに気が付いた。何故健側に迄、
しかも大腿にもシビレがあるのか、趾の運動はよくでき
るのになどとペンタゾシンでぼんやりした意識のなかで
繰返し考えているうちに夜が明けた。回診にきた術者は、
術中所見 ― 根の癒着がひどいこと、椎間板はパサパサ
で少量しかなかったこと等 ― の説明をしながらシビレ
についてはわからないと困惑している。こちらも手術に
原因があるなどとは思っていないし ― そんな心配があ
るなら術者をおねがひしない ―、二人で何だろろうね

どと下をむいたりしてやや白けた雰囲気になる。お昼過
ぎ自尿があつて気分が落ち着き、シビレもうすくなつた
頃、はたと、それが手術中の体位に起因するものである
とひらめいた。小生のようにやせ型の場合、手術台上に
正坐し、前方に平伏するマホメッド体位をとると、腸骨
前上棘周囲で大腿外側皮神経が、膝窩部で腓骨神経がそ
れぞれ圧迫されることは充分に考えられる。大腿からシ
ビレがあつても何の不思議もないのである。事実、数日
後に腸骨前上棘より腸骨内縁を注意深く圧迫した所、大
腿前・外面に焼けるような放散痛を生ずる部位がみつか
り、自説の正しさに安心したりした。手術のいたみがま
つたくなつたのは四日目位であつた。注射を要した
のは二晩目迄で、あとは内服で充分がまんでできる。しか
しこの期間中にいたみの原因をやれ Sacrospinalis
が椎弓に癒着しないで丸まっているせいだろうか、ナ
イロンの皮膚縫合糸が当たっているせいだろうかと実
際限もなく考えるので我ながらあきれるほどであつた。
術後二日目に、仰臥位を続けているからいたみに違
ないとの幻想から側臥位になる努力をしたが、途中でい
たみのため動けなくなりかえつていたみが強くなった。
又仰臥位で骨盤を持ち上げることがいたみのため大変困
難であることを知つたのもこの頃である。四日目よりト

イレ歩行をしたが、結局三週間位はほとんど床上安静を守ったようである。大腿四頭筋訓練はよく行ったが、下腿の筋力増強は床上仰臥位では無理なこともはじめてわかった。

術後二ヶ月より出勤したが、主治医や、看護婦さん達がかばってくれたおかげで何の困難もなかった。以後現在迄多少の痛みは出没しているが気になるほどではなく、回復も早い。しかし背筋力は弱く、一〇〇迄とても及ばず、従って重い物をもつのは一番のりがてである。

最後に誌面を借りて、市原・文両先生に感謝するとともに、当時約二ヶ月にわたって応援をいただいた教室の皆様及び御心配をいただいた同窓の皆様には厚く御礼申し上げます。



北里賞受賞

おめでとう花岡英弥君

福田宏明 (40)

三年先輩をつかまえて花岡君もないかも知れないが、先生と書くとは人行儀に過ぎる感じになる。慶応の伝統に従ってあえて君付けで呼ばせて頂く。不悪。

花岡君は第五〇回三四会総会（昭和五十六年六月）において塾医学部最高の名誉である北里賞を受賞された。受賞対象は正常および腫瘍の骨の細胞の起源と相関に関する一連の電子顕微鏡学的研究である。十有余年に亘る地道な努力の積み重ねが認められた訳で、御本人の控え目な喜びのほしほしにアメリカの師フリードマン博士の厳しい指導に応えた苦労が窺われる（研究余滴、三田評論八二〇号、昭和五十六年十二月）

塾医学部には北里・北島両賞があり、それぞれその年の学部内の優れた業績を表彰している。北里賞は昭和二十七年以来五十名が受賞し、花岡君はその五十一番目に当る。一方北島賞は昭和三十三年の制定以来今日まで三十七名が受賞している。何故かわが整形外科教室は両賞に縁遠く、今回の同君の受賞をもって遅ればせの嚆矢となった訳である。日頃同君の研究に対する真摯な取り組み方を敬愛する筆者らにとってもこの上ない喜びである。

さて、同君の研究内容を詳細に紹介、論評するには筆者のよくその任に耐えるところにあらず、また小文の趣旨でもない。ここではただ筆者の感想の一端を述べるにとどめる。

成長軟骨細胞が最後には死滅することを立証したのは同君の在米中の研究が基礎となり、帰国後新たに発展、完成した研究であった。ここで用いられた成長軟骨層の低倍率と高倍率の電顕像を組合せる手法は、その柱状構造のオリエンテーションと軟骨細胞の死滅を明快に示す効果があった。また軟骨細胞は生き残るとするホルトロップ学説を、その根拠とするオートラジオグラフィの解釈の誤りを指摘する箇所は圧巻である。御本人は最も苦勞されたところに違いないが第三者的にみると、やや不謹慎ながら推理小説的な面白さがある。一連の電顕のいわば静的な世界の中

で、このところには門外漢にも躍動感あふれるダイナミズムが感じられる。

同君の研究の手法はJ B J S のレフェリーとの交渉にも發揮された。たしか骨端線の論文の時、前記ホルトロップがポストン学派ということもあってか、花岡論文に対して頁数制限という形で対応して来た。これに対して彼はまず論文を出来るだけ縮小したのち、J B J S 誌上に最近掲載された同種論文に与えられた夏数を刻明に調べ上げた。そしてそれらと較べて花岡論文への予定頁数が理不尽に少なく、これ以上短かくは出来ない」と反論し、遂に説得に成功した。J B J S 編集局との軋轢は米国では日常茶飯事と聞かぬが、遠いアジアからの交渉は必ずしもこのようにうまくは行かない。この経緯にも根拠を示して熱心に説得する同君の面目躍如たるものがある。

さて当然のこと乍ら表彰の結果に対して与えられるもので、これを研究の目的とすべきではない。そしてまた北里賞のように全学部的視野での選考に耐える業績は独りよがりの研究からは生れない。われわれは花岡論文から仮説、推論、実証という激しい論理的思考過程をこそ学ぶべきであろう。敬愛する花岡兄の名譽ある受賞を喜ぶと同時に後続の研究者がこの受賞をよい刺激として更に発展することを願って止まない。終りに同君の好むポアンレの言葉「真理とは多くの仮説の中で、全ての現象を最も矛盾少なく説明しうる仮説である」を付記する。

主要受賞対象論文

Hanaoka, H. et al.: Ultrastructure and histogenesis of
giant-cell tumor of bone, Cancer,
25:1408-1423, 1970.

Hanaoka, H.: The fate of hypertrophic chondrocytes of
the epiphyseal plate An electron microscopic
study, J. Bone and Joint Surg., 58-A:226-229, 1976.

Hanaoka, H.: The origin of the osteoclast, Clin. Orthop.
145:252-263, 1979.

神奈川県慶大

整形外科同窓会の記

今井 望 (32)

神奈川県は古くから慶応の関連病院が多く、また県内に開業する教室同窓の方々も可成の数になる。故久保義信先生御健在の頃には、先生の音戸とりで時々神奈川県内の教室同門会的な集りが催されたそうである。実は筆者が昭和五十年東海大学に就職したさいも県内同窓の方々から歓迎会をしていたのであるが、これを最後にあれから七年、久保先生の御不幸もあって、この会はぶつり中断した形になってしまっていた。この間に関連病院の院長、医長を含めた人事移動が幾つかあり、新たに県内に開業された方々もあって是非県内同窓会を開いてほしいとの声があちこちで聞かれ、今回東海大整形外科がその幹事役をお引受けした次第である。

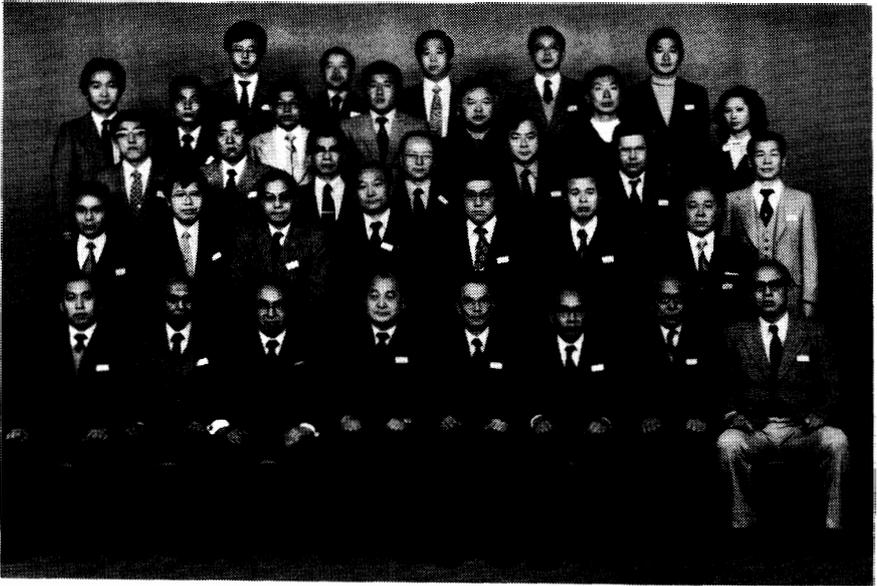
実は東海大学の整形外科も、小粒ながら名前だけは一つの教室をなしているの、我々が幹事役をした今回は、本家と分家の合同懇親会とさせていただき、慶応の同窓の諸先生に我々の若い教室員が御挨拶する機会を持たせていただいた。

この日の会場は風変りな趣向で、寒川神社参集殿とし

た。この寒川神社は茅が崎と伊勢原の間の寒川町にあり、相模一ノ宮として相模野一帯の古くからの信仰の中心的存在となってきた格式の高い神社であるが、面白い事にこの神社が寒川外科と言うなかなか設備の良い診療所を直接経営していて、この方面から東海大学の教室と神社の間にこの二・三年多少の関係があったのである。会場の参集殿は、やはり神社直営の集会所であるが、一寸したホテル並みの宴会場がある。交通の便は悪いが、料金が比較的安いので幹事としては大変助かるところである。昭和五十七年一月十六日、風花が舞い、寒さが肌を刺すような日であった。宴会は六時からであるが、折角神社で会をやるのだからということ、希望者の募り、団体で御被を受けることになった。希望者が意外に多く、十五名程が早目に集まり、一月の寒風が吹通る拝殿の冷たい床の上に、借り着の白い羽織りをつけて畏り、神宮の祈禱に従って各自思い思いに、しかし大方の人が主に無病息災、家内安全という小市民的な願い事を神頼みしたのであった。

同窓懇親会は六時より始まったが、慶応より泉田教授、竹田医局長の御出席をいただいた。幹事（今井）挨拶、野間箱根病院院長挨拶のあと、泉田教授より教室の現況、岩原先生の御病状などの御話があり、さらに日整会学

会長の件に触れられ、伝統ある慶応大学整形外科教室が昭和二十五年以来本学会を担当していないので、是非近々に学会を慶応主催で行いたいとの、先生の意中を力強く公表された。このあと金井先生が立って激励の辞を述べられ、会のムードは高潮に達した。会員が次々に立って現況やら今年の抱負を述べ、賑やかに会は進行したが、終りに近づいた頃肥沼会員が琅々玉を転す美声で民謡「頸城松坂」(新潟県頸城郡に伝わる大変目出度い民謡である)を披露し、参会者一同を魅了した。最後に母教室の益々の発展を祈り、この会を定期的に開いて末永く続けて行く事を約し、東海大学有馬助教授の発声で「締め」を行って閉会した。



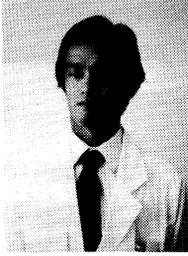
神奈川慶応、東海大学整形外科同窓懇親会
昭和57年1月16日 於 寒川神社参集殿

新人紹介

昭和五六年度

春期入室

安藤 千博



出身：独協医科大学

整形外科を志望した理由：

外科系の科に進みたかったから

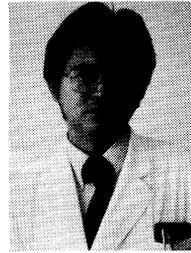
自分が一度骨折して、骨折の

痛みを知ったから。

性格：おとなしい

趣味：テニス、ヨット

(テニス歴十年、ヨット歴四年)



磯崎 秀明

出身大学：金沢大学医学部（S五四卒）

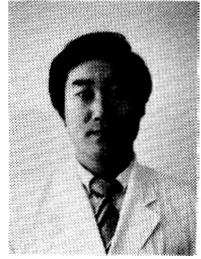
慶応大学小児科二年間入局

慶応の整形外科に入局させて頂き、約一年半経ちました。都立大久保病院を経て、静岡の清水市立病院で働いています。入院患者の三割近くが刺青をしており、毎日回診の度にその色彩に感激しています。

清水に来て釣りに大へん凝りまして、地元の方の協力も得て、これ迄に三〇cm級のクロダイ四匹あげました。

清水は以外な穴場だとつくづく思います。

これからもよろしくお願い致します。



伊 藤 敬 一

私は東京医科大学卒業後、慶応大学病院整形外科に入局した。

身長一七一、一cm、体重？kg、柔道三段、スポーツは何でもやる。特に勉強は大の苦手である。しかるに机に向うより体を動かす方が好きである。

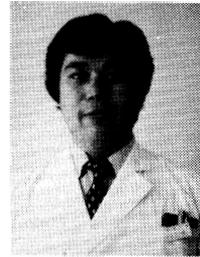
語学：日本語、とてもsk yが性格でとりえはOB。

入局し一ヶ月で十五kgのweight downを認めるも以後、多少のincreaseを確認、しかし測定せず。

入局一年経過した現在、周囲の諸先生方の良い指導の基でおおらかに仕事をさせていただき、どうしようもないくらい明るい生活をしている。しかし我が恩師と祈む方から「よく遊びよく学べ」の実行をせよと言われているが、でも私はやはり「よく遊び少し学ぶ」としかできない。

現在は勉学に力を入れるように、又遊びも忘れないようにムチ打たれている。私が将来どの班に入ってやることになるかわからないが、いずれにしろこの方針「よく遊びよく学べ」でゆきたいと思えます。

川 久 保 誠



出身：独協医大
入局の動機：

以前よりスポーツ医学に興味があったこと、又、守備範囲が広く、小児の先天性疾患から老人の退行変性まで扱えること。入局して約二年を経ますが、諸先輩がたの指導のもとで、充実した日々をすごしています。

趣味：スポーツ

(野球、テニス、ゴルフも少しははじめました。)

張 簡 俊 添



生年月日：昭和二三年七月一日
出身校：台湾中国医薬学院↓長崎大学医学部

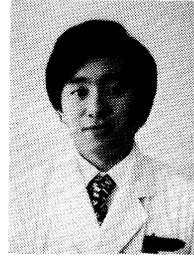
趣味：卓球

入局の動機：

一、整形外科医になりたかった
二、慶大整形の知名度及び臨床の業績に魅かれた。

入局後の感想：医局及び病棟の雰囲気は明るく良い諸先輩達の御賜教及び身の囲りまでお世話を頂き本当にありがたございます。在日は六年間の予定ですがこれからも一層御指導下さいます様お願い致します。

持 田 郷



出生：昭和三十年十月十一日

出身：麻布高校↓千葉大学

趣味：推理小説、音楽（聴くことだけ）、ゴルフ。

動機：自分に一番向いていると思ったこと。

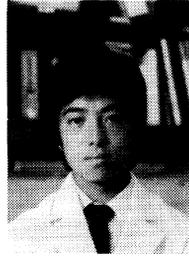
感想：最初の出張で悲喜交々の毎日を送っています。

昭和五六年度 秋期入室

小 野 俊 明

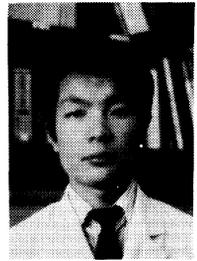
卒業して入局してから早いもので、もう満一年経ってしまいました。我々の学年は、いろいろな事情があって、半年遅れの十月に入局、私は我々の中では一番早く、翌年の五月には出張となり、何もわからないまま、今日まで来てしまいました。

学生時代には、御世辞にも整形外科の授業に良く出席したとは言えないし、特に興味をひかれたという科目でもなかったのですが、昔から割と細かい手仕事が好きで、そんな程度で整形外科を選択してしまいました。しかし、一年経った今では、全く別の観点からおもしろい分野である様に思えて来たのであります。他のどの科においても同じなのでしょうが、古典的な内科、外科に比べ、整形外科の場合、診断法や治療法に関してある程度の幅があり、時代時代の変遷も大きく、自分で決定する要素が大きいかように思えるのです。こんな事を書く、それは違うと言われる方がありますが、これは単に一年坊主の戯言と、お聞き流してください。



川島 明

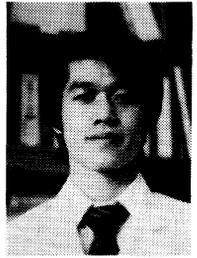
諸先輩の先生方、始めまして。昭和五六年卒の川島明といます。現在、慶応での一年間の研修を終えて、九月から足利日赤での研修をやらせて頂いています。整形外科には、ポリクリ時の雰囲気明るさにひかれて入局しましたが、最近、整形にして本当に良かったと思っています。足利では、交通外傷のkrが非常に多く、いろいろな種の外傷を見られるチャンスに恵まれ幸いです。主治医として平均二五人くらいの患者さんを受け持っていますが、パラメディカルの人たちとの協力体制も整い、とても能率良く仕事ができます。医師として勉強の他にも、ゴルフやカラオケの練習にも精を出して、フレマンとしての仕事を全うしてゆきたいと思えます。



切東 喜久夫

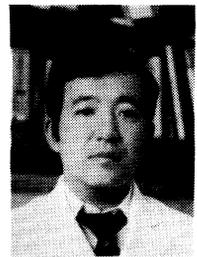
初対面の方にはいつも「キリトウ」とか「セットウ」とか呼ばれるのですが「キリヒガシ」と読みます。私は徳島出身でありまして大学入学から東京に住んでいます。大学時代は空手部に入部し、「花の学三」の時には主将をしていたせいもあり、週三の練習は一回欠席したのみですが、講義の方は三六五日程で数えられる位しか出席せず、今思えば「天国の学三」ではなかったかと思えます。従って613病棟にいた頃は気持の入れ代えが大変でした。現在は麻酔科をローテートしていますのでマイペースでやっています。

整形入局の動機と云えるかどうか判りませんが、消去法で決めました。眼・耳とかのminorはダメで、外科系で将来に関していろんな面でflexibleな科ということで残ったのが整形でした。今後何を専門にするかは未定ですが、今度は積極的に自分のやりたいものを見つけようと思っています。消去法で入局した整形でしたが、良き先輩方にめぐまれ、又自分自身も整形に関して違和感もないので、ほんとうに良かったと思っています。今後出張で各関連病院で御世話になると思えますので、宜しく御指導の程お願いいたします。徒然草より「狂人と言ひて大路を走らば即ち狂人なり……いつわりても賢を学ばんを賢と言ふ」の精神で頑張りたいと思えます。



小林 龍 生

年令：二七才、身長：一七一cm、体重：五六kg、本籍：香川県、現在まだ独身です。家族構成：両親と姉が一人、姉はもう嫁いでいます。出身校：灘高等学校、出身は神戸、両親は神戸にいます。性格：特に明るいとか暗いとかは思われない、どちらかというとならぬ方。嫌いな食物：特に嫌いな物はないが、ニンジンの子供の頃からあまり好きになれなかった。好きなスポーツ：昔はバレーボールをやっていたが、今はあまり好きではない。どちらかというとならぬ方、今はあまり好きではない。趣味：時たま油絵等を書く事がある。近況：現在慶応病院で麻酔科をまわっています。九月からは埼玉中央病院勤務となります。入局の動機：薬を投与して治るのを待つだけの内科系より、実際に手を下す外科系の方が仕事のしがいがあると思つた事と、外科と整形を比べて整形の方が需要があるという話なので、整形を選んで入局しました。整形に入つての感想：遊ぶ時は遊ぶ一方では、仕事に自分の研究に非常に情熱を傾けている。諸先輩方を知つて好感が持たれました。今後の抱負：まずよい臨床医になれる事を考えてこれを目標にしたい。何について研究するかは、まだまだ先の話だろうが、将来は、自分なりに何か残せるようにガンバリたい。



中 村 俊 夫

私が整形に入局して、十ヶ月がたった。慶応病院で、整形四ヶ月、麻酔四ヶ月を経て、現在、平塚市民病院の御世話になっている。時が過ぎるのは早いもので、一週間などは、「アッ」という間である。毎日、新しい発見があり、諸先生方の御指導により充実した日々を送っている。

大学六年間は、明けても暮れても「軟式テニス」だった。日吉の一年目は、コートの脇でただひたすら、素振り素振り。面が出ていようがまいが、ただ振りまくつた。入部五ヶ月目でボールを打たせてもらった。ラケットに当たればいい方で、空振りばかり。自分の才能のなさにあきれてしまった。そのうち少しずつ工夫するようになった。ラケットの真ん中にあてよう。面をきれいだそう。そうはいうものの、ちょっとやさつとでは、うまくならない。単に素振りしていても、面を考えながら丁寧にボールを想定する様になって徐々に、打てる様になった。

毎日、いろいろな症例にでくわすが、無駄にせず、一つ一つ大切にしようと思つる頃である。



山内 健 二

出身地：東京築地

出身校：慶応高校↓慶応医学部

身長：一七五cm、体重六四kg

年令：二五才、独身（S五七、八、二現在）

趣味：音楽（フュージョン）、スポーツ（スキー、テニス、ゴルフetc）、食べることに。

特技：無芸大食

好きな女優：山本陽子

好きな食べ物：うまいものなら何でも可。

医局にはいった感想：とてもやさしいお兄さんばかりで、

大変うれしく思っています。これからもピシピシきた

えてやって下さい。

これからの抱負：一言「がんばります」



矢 守 茂

昭和五十六年、五十七年は、私にとって激動の年でありました。卒業、国家試験、入局、結婚。いままでの気楽な学生生活から、一転して社会人、戸主となり、様々な責任を感じるようになりました。

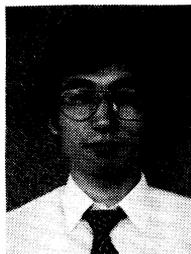
整形外科では、オーベンの吹本先生、丸谷先生、藤井先生、矢部先生をはじめ、多くの先生方にお世話になりました。

リハビリ科に入局したのは、私一人でしたが、整形外科の同級生と助け合って、時折飲みに行ったり、独立祭の練習など楽しい思い出もたくさんできました。

これからのリハビリ医としての人生に、最初に整形外科学教室で研修できたことは、本当にラッキーだったと思います。

これからも、出張病院でいろいろお世話になりますので、よろしくお願いたします。

昭和五七年度 入室



伊 部 茂 晴

今春、大学を卒業、整形外科に入局してから、まもなく半年が過ぎようとしています。学生時代の不勉強のせいか、見るもの聞くもの全て新鮮で、あっという間に Freshman としての一年間が過ぎてしまいそうです。

整形外科には、学生時代より、クラブ（競走部、ラグビー部）の練習等でケガをする度にお世話になっておりましたので、いちばん親近感があり、つい入局してしまいました。入局してからは、その学問としての幅広さ、深淵さにとまどうばかりです。が、それだけに、やりがいのあるものと思ひ、この科を選んだことに幸運を感じます。

新人としまして、とにかく患者さんの苦しみを少しでも理解し、それを軽減してあげられるようになることを念頭におき精進していきたいと思ひます。諸先輩方には、ますます御世話をかけることになると思ひますが、よろしくお願ひいたします。



伊 佐 治 純

出身地：名古屋市
出身高校：明和高校

大学：慶応大学

スポーツ：水泳・サーフィン・野球・クラシック観賞等
何もしない。

大学での生活：勉強はほとんどしなかった。だから整形はたぶんCであろう。自分でも当然と思ったので確認しなかった。しかし最近勉強しているので今ならBはとれると思ひます。

趣味：ぼんやりすること

近況：ぼんやりしすぎたため、ちほうと失語症と、うつ病になってしまった。人生も半ばに近づいたという感がひしひしとする。この状態を打破するため、勉強に打ち込む予定です。

入局動機：整形外科は奥が深いので、一生勉強する喜びを味わえると思ひて選びました。



市川 亨

出身高校：開成高等学校

出身大学：慶応義塾大学医学部

スポーツ：野球部（外野手）

入局の動機：最後まで整形が形成か迷っておりましたが、ポリクリの最終に整形を回った時、自分の道はこれしかないと感じるものがあり、決意しました。その節相談にのって頂いた矢部先生に心から感謝しております。抱負・信念：

①体でもって一つ一つ技術を身につけて早く自信をもつて診療できる医者になつていくこと。

②「患者が最良のテキストである」という言葉を常に念頭におくこと。

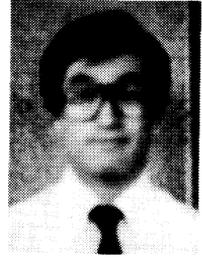
③いつも新しい方法を模索するフレキシブルな頭をもつこと。

感想：素晴らしい先生方ばかりで本当によい教室を選んだよかったと思っております。今後とも御指導・御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



金子 修

慶応義塾大学病院整形外科教室に入室して以来、あっという間に半年が過ぎたとは言えまだまだよちよち歩きという状態です。それどころかまだハイハイ歩きをし諸先生方におむつを取り替えてもらっている状態といった方が適切かと思われまます。ところで私の得意種目といいますが、麻雀、ビリヤード、テニス、スキーなどジャンル、スポーツ全般ですが、不得意種目はアルコール、女性、勉強と、前二つは今後の精によって何とかなるとしても、致命的なものは勉強でして、以後日々努力し是非得意種目の一つに加えたいと思っています。入室後多くの先輩諸先生をはじめ同輩と共に整形外科医として学び、又時には羽を伸ばし遊ぶことは非常にうれしい事です。私はどちらかというと後者のみという感もありまます。ですから私の場合「よく学びよく遊べ」ではなく「よく学びさらに学べ」の精神が必要と思われまます。病院での一日一日が目新しい事ばかりであり、経験であり、勉強であり、今後共、御指導の程よろしくお願ひ致します。



鎌田修博

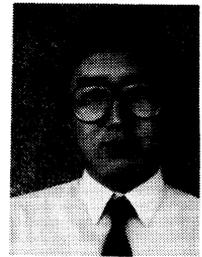
出身地：東京

出身校：開成高校↓慶応大学

趣味：学生時代は、バスケットボールとスキーに専心しました。現在、バスケットで慶応病院チームを復活させたく色々と活動しています。

動物園と水族館が好きで、毎日見たい程です。本当は上野動物園の園長になりたかったのですが、もっと高等で複雑な哺乳類を毎日診なければならなくなった現在、やはり、動物園の方が向いていたような気がします。患者もまわりも複雑すぎて……。

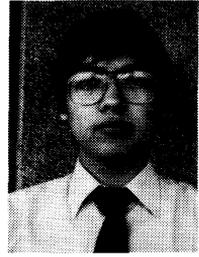
パンダがとてかわいいので、次はオーストラリアに行ってコアラを見たいと思っています。



塩田匡宣

「いつもニコニコしていて、ニコニコしているだけだと思っただけ時々変な質問をします。家は千葉の勝浦ですので海水浴シーズンにはみなさんでどうぞ。」と独立祭で卒訓担当の伊藤先生に紹介された塩田です。

整形外科に入局して何もわからぬうちにあっという間に半年が過ぎてしまいました。学生時代とちがった厳しさを何度か味わいましたが、一度も入局を後悔したことはありませんし、これからはないと思います。整形外科のおもしろさも多少わかってきたような気がします。これからよろしく御指導お願い致します。



手塚 正 樹

出身高校：麻布高校

出身大学：慶応義塾大学医学部

趣 味：映画観賞・読書

小学生の頃より映画の魅力の虜となっています。映画論云々とうるさいことを言わないで敢えて観賞としました。

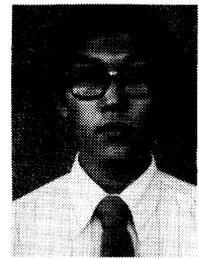
クラブ：

水泳部 学生時代は主に麻雀部門に徹していました。

医事振興会

入局の動機：外科系志望であり、マイクロサージャーに興味をもち、また脳神経系もやりたかったので、整形外科ならすべて出来ると思い入局しました。

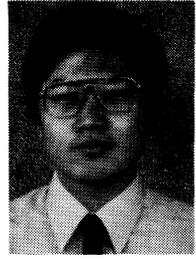
抱 負：早く臨床のできる医者になりたいと思います。よろしく御指導お願いします。



富 澤 和 夫

出身校は独協医科大学で、栃木県の宇都宮と栃木市の中間にあります。在学中では、暇があると自転車で大学周辺の道を走り回り、夜は複製機や帆船などの懐古趣味的な模型の制作に熱中していました。

整形外科は外科という名称をもつが、手術だけが治療ではなく、ギプスや理学療法など多岐に及んでいる。その点からみると治療法の選択を考えてゆくには新人にとっては難しいと思われる、個々の症例を大切に勉強してゆきたいと思っています。



野村 栄 貴

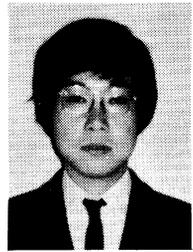
生年月日：昭和三十三年八月十一日 二十五才

出身高校：慶応義塾高等学校

趣 味：酒と音楽

スポーツ：野球・テニス・スキー（なにかやってみること）
入局の動機：ポリクリで回っているとき、整形の先生は
ダイナミックな先生ばかりで、自分に合っているかと考
えた。又小さい頃から骨折を何回もやっているので、
自分で治せるようになりたいと思ってた。

入局後の生活と感想：勉強は少々、遊びはしっかり。
諸先輩には時に優しく時に厳しく（最近は小生の不勉強
のためか厳しさ増している）教えて頂き、整形外科
を選んで良かったと思っています。



三浦 正 明

本 籍：京都市（両親の実家）

生年月日：昭和三十年十月二十一日 東京に生れる

出身高校：慶応義塾普通部高等学校を経て慶応義塾大学
を卒業。

学生時代：成績 低空飛行 特に生理学はよく勉強した。

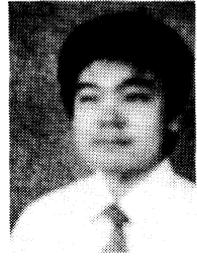
スポーツ 体育会器械体操部

趣味 旅行 SL撮影

入局の動機：小学校の恩師が片マヒとなり、公衆衛生学
で労災患者の実態をあちこちで見えてきて障害者の機能
回復に大変興味を持っている。

信 念：練習は不可能を可能にする。

抱 負：いろいろとハンディを持っており仕事に慣れ
るのに時間がかかると思いますが、息の長い仕事をめ
ざして私なりに全力投球でぶつかって行きたいと思いま
す。こんな私ですが、諸先輩、諸先生方の御鞭撻御指導を
よろしくお願い致します。



山中 一良

昭和三十一年四月十六日生まれ。横浜出身。神奈川県立横浜翠嵐高校卒業後、慶応義塾大医学部入学。学生時代のクラブは医学部管弦楽団で、バイオリンを弾いていました。卒業後はバラエティに富んだ整形を選びました。入局してから、わけもわからぬうちに3ヶ月が過ぎました。早く整形の全領域が見通せるようになりたいと思っています。余暇にはギターを弾いたり、クラシック音楽を聞いたりしております。諸先輩の先生方には御指導の程宜しくお願い申し上げます。



渡辺 邦夫

昭和二十七年一月十日生まれの三十才。同期入局中の最年長ですが、精神、肉体共に一番フレッシュであると自負している、ヤングオジジです。昭和五十三年エルの学園、北大を卒業後、順天堂で麻醉学を研修し、今春入局しました。学生時代はテニスとアイスホッケーに打ち込み、また「すすきの」のプリンスとして、完全燃焼してきました。「よく学び、よく遊べ」の主義で、瞬間瞬間が人生というような緊張感のある、吹っ切れた生き方を心掛けています。海と夏、そしてロックンロールが大好きで、日焼けは男最高のお洒落と信じている、お祭り人間です。数年前ポパイ少年を卒業し、現在ブルータス青年をやっています。今後は慶応のスマートなライフスタイルと、北大の素朴な味をミックスし、義理と人情にどっぷり浸りながら、ひたすら突っ走ろうと考えています。知識の乏しさは体力で補ない、一生懸命頑張りますので諸先生方、宜く御指導の程、お願い申し上げます。



拝啓

早川 武憲

慶応大整形外科教室関係の諸先生方に新入局のごあいさつを申し上げます。

小生、浅学非才の身ではありますが、慶大整形の伝統と業績、学問の香り高き風格ある教室、素晴らしい諸先生方にあこがれ、今年春東医より入局させていただきました。早川でございます。

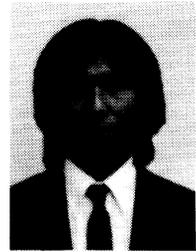
何分にも若輩未熟者由、精神努力至す所存ですが御迷惑もまた多々あるかと存じます。

何卒御指導御教授下さります様、よろしくお願い致します。

敬具

昭和五十七年晩秋

6号棟3階当直室にて



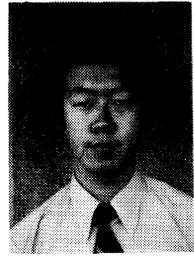
野本 聡

生年月日：昭和三十一年八月二十八日
出身高校：開成高等学校

外科に行こうか整形外科に行こうかと迷いましたが、今では本当に整形外科にして良かったと思っています。まだ慶大整形外科以外で働いたことがなく、六号棟三階の暖い環境しか知らない私ですが、今後、様々な苦しい経験もすると思います。とにかく精一杯勉強し、一日も早く、諸先輩先生方に追いつきたいという気持です。

レジャーは好きで、特に学生時代は青春のほとんどもスポーツに注いでいたので、余裕がでてきたら、またスポーツを始めたいと思っています。

十月に結婚しまして、生きるということのきびしさを今初めて知りました。今後、諸先輩、先生方の御鞭撻、御指導をよろしくお願い致します。



福井 康之

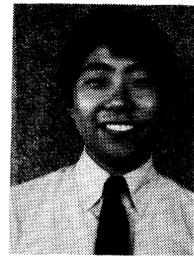
生年月日：昭和三十二年十二月十三日（金）

出身校：聖光学院↓慶応義塾大学医学部

クラブ：中学・高校は水泳部、大学は端艇部

趣味：スポーツは何でも好きですが現在はゴルフを練習中。クルマが趣味でよく走りますが、医師の免許を取ってからは黄信号で急停止する程安全運転になりました。逆に世界中で一番嫌いな物はタバコの煙です。入局の動機：神経内科の先生の五〇％の勉強量で五千倍の喜びを患者に与えられると思ったので。

入局後の感想：学問・人格共に優秀な先生が数多くいらっしゃると思います。心・技・体と三拍子そろった医師になれるよう頑張ります。よろしくお願い致します。



星野 達

そろそろ梅雨の明けそうな、きょうこのごろですが、先生方はいかがお過ごしでしょうか。私は七月一日より済生会宇都宮病院に出張しております。エラストやアルトロに取り組んでは汗を流す毎日です。OPeに入る数も多いため糸結びも真剣に練習しなおすはめになりました。慶応といちばん違う所は、外傷と骨髄炎が多いことです。骨折や救急外傷を見ていると整形外科をやっているんだなあ、という実感がひしひしと伝わってきます。なんとなく残っていた学生気分もついぬけてきたようです。これからは何でも自分でやらねばいけないんだ、という自覚とともに、いくぶん不安になるような気もします。早く実力をつけて、不安を感じなくてもいいような立派な医師になろうと思っています。諸先生方、今後ともよろしく御指導のほどお願いいたします。



尾 河 昌 子

昭和三十二年十一月一日生まれ、三才の時に東京に転居し、一度も自宅を離れることなく、現在に至っております。思えば、ふとしたきっかけで慶応義塾中等部に入学したこと、ラッキーのみに恵まれてきているのではないでしょう。高校より医学部に進学し、その後の六年間は、あつという間に過ぎてしまいました。今、病院内で研修をさせて頂いてますが、まだ、自分が本当に医師らしくなっていないのではととても思えません。ただ、私自身が患者であったら、どんな先生に診て頂きたいか、ということをも考えていたいと思っております。

もし、私にもう少し体力と腕力があつたならば、そしてもしも私が男性であつたならば整形外科を勉強したか

つたと思いません。これからもよろしく御指導頂きますようお願い申し上げます。



正 門 由 久

生年月日：昭和三十一年十一月十七日

出身地：東京都

出身学校：早稲田中学・高等学校

出身大学：慶応義塾大学医学部

住 所：東京都江東区大島五―四十八―十五

趣 味：音楽をきく・歌う・酒を飲む

野球・柔道・格闘技・ラグビー等の力のあまっている人がやるスポーツが好きであります。

大学生活：やりたいことをやった感があります。いろいろな人を知っておもしろかったと思います。クラブは柔道をやっていました。整形外科にはクラブの先輩が多く、つついさそわれました。

入局後の感想：整形外科はやはり入ってみなければおもしろさがわからない非常におもしろい科であると思います。以前感じていたよりもおもしろいと思いました。



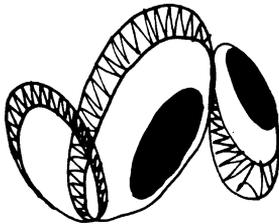
峰 尾 喜 好

出身校：都立小松川高校（昔は、府立第七高女といわれ、荒川の堤を乙女たちが唄など口づさみながら遊んだそうです。小生が通った頃、バイク通学の乙女も居ました。）

住 所：東京都江東区門前仲町二ノ六ノハ

家々が隙間なく建ち並ぶ下町といった感じですが、近所には、富岡八幡宮や深川不動尊の緑が遊び場となり、月に三回縁日がたちます。商船大学の構内は整然とし、今は走らぬ明治丸が設置されています。かなり損んですが、明治の面影は充分に残っています。

大学生活：アイスホッケーをやりました。先輩から絶対に勉強してはいけない、と云われ、その通りにしていたらひどい目に会いました。医者になったら勉強するぞ、と思ってきましたが、アッという間に半年が経ってしまった。



— 教室だより —

教室人事

△新 医 長▽

国立東京第二病院

田無病院

日本専売病院

済生会中央病院

稲城市立病院

荻窪病院

都立松沢病院

川崎市立川崎病院

小田原市立小田原病院

国立療養所東埼玉病院

国立栃木病院

佐野厚生病院

浜松赤十字病院

伊勢慶応病院

済生会横浜南部病院

月ヶ瀬リハビリテーションセンター長

細川昌俊君 (五十八、四)

三倉勇闊君 (五十八、六)

井口傑君 (五十八、三)

三谷哲史君 (五十八、四)

磯田功司君 (五十七、一)

田崎憲一君 (五十八、七)

大崎康正君 (五十六、九)

赤坂勤二郎君 (五十七、七)

竹田誠君 (五十七、七)

中川智之君 (五十七、八)

三笠元彦君 (五十八、四)

原貴君 (五十八、六)

山中芳君 (五十八、三)

田村興太郎君 (五十八、七)

中西忠行君 (五十八、六)

横井正博君



昭和五八年五月済生会横浜市南部病院(写真)がオープンし、中西忠行君(四五回)が医長として赴任しました。慶応からは整形外科の他、耳鼻科、皮膚科が開設に参加しています。

△五八年度春季インストラクターレジデント人事▽

○インストラクター

加藤 哲也 君	国立東京第二病院
家田 浩夫 君	国立埼玉病院
藤中 星児 君	慶応婦局
戸山 芳昭 君	埼玉中央病院
持田 譲治 君	稲城市立病院
樋口 正隆 君	北里研究所附属病院
水品 彰彦 君	平塚市民病院
根本 孝一 君	国立栃木病院
岩瀬 剛 君	国立塩原温泉病院
大熊 哲夫 君	松沢病院
広本 明敏 君	川崎市立川崎病院
白石 建 君	浜松療護園
小林 保範 君	浜松療護園
浜田 一寿 君	慶応月ヶ瀬リハビリテー ションセンター
石橋 徹 君	慶応婦局
高畑 武 君	慶応婦局

○レジデント

高山 真一郎 君	東京齒科大市川病院
山田 治基 君	清瀬小児病院
宇佐見 則夫 君	国立栃木病院
根本 哲夫 君	川崎市立川崎病院
木城 利光 君	佐野厚生病院
田中 京子 君	埼玉中央病院
田中 耕一 君	伊勢原協同病院
堀江 康夫 君	済生会神奈川県病院
植野 満 君	足利赤十字病院
柳田 雅明 君	浜松赤十字病院
柳本 繁 君	警友病院
福秀 二郎 君	伊勢慶応病院
中村 俊夫 君	大田原日赤
川島 明 君	佐野厚生病院
小林 龍生 君	清水市立病院
山内 健二 君	川崎市立川崎病院
小野 俊明 君	稲田登戸病院
松本 秀男 君	慶応婦局
木村 記行 君	慶応婦局

鷺谷 一郎 君 慶応婦局

△五八年度春季フレッシュユマン人事▽

伊 佐 治 純 君	清水市立病院
伊 部 茂 晴 君	東京齒科大市川病院
市 川 亨 君	伊勢原協同病院
金 子 修 君	静岡赤十字病院
鎌 田 修 博 君	済生会神奈川県病院
塩 田 匡 宣 君	埼玉中央病院
手塚 正 樹 君	足利赤十字病院
富 沢 和 夫 君	済生会中央病院
野 村 栄 貴 君	平塚市立病院
野 本 聡 君	日野市立病院
早 川 武 憲 君	警友病院
福 井 康 之 君	済生会宇都宮病院
星 野 達 君	稲田登戸病院
三 浦 正 明 君	高岡市民病院
山 中 一 良 君	芳賀赤十字病院
渡 辺 邦 夫 君	川崎市立川崎病院

△留 学▽

吉 峰 史 博 君	英 国	オックスフォード大学
泉 田 良 一 君	ス イ ス	チューリヒ大学
木 村 彰 男 君	米 国	アイオワ大学
渡 辺 良 君	米 国	サウスダコタ大学

新 専 任 講 師

富 士 川 恭 輔 君	五十六、十三
伊 藤 恵 康 君	五十七、四一
戸 松 泰 介 君	五十七、四一

おめでとうございます。今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

慶弔のお知らせ

○御結婚

		57年											56年			
4月	3月	1月	12月	12月	11月	10月	10月	9月	5月	5月	5月	4月	4月	3月	3月	2月
齊藤秀夫君	矢守茂君	湯沢喜志雄君	大熊哲夫君	齊藤聖二君	中邨裕一君	丸山純夫君	梶原敏夫君	高畑武司君	里元正君	佐々木正君	阿部均君	宇佐見則夫君	戸山芳明君	木城利光君	飯島謹之助君	木村記行君

○御逝去

			57年								56年	55年									
2月	1月	1月	1月	12月	11月	10月	7月	3月	2月	1月	1月	12月	12月	11月	10月	10月	9月				
海村昌和君	瀬尾喜郎君	平林正憲君	高橋雅徳君	一杉雄一君	彦坂宏君	崎原慶紀君	末沢恒夫君	関牧一君	上川清久君	小川信正君	鈴木村慎介君	寺川慎介君	市川慎介君	中村俊夫君	野本秀聡君	磯崎孝一君	根本正隆君	樋口良一君	泉田修博君	鎌田修博君	
	御母堂	御尊父	御尊父		御尊父	御尊父	御尊父	御母堂	御母堂	御尊父	御母堂	御母堂	合夫人	御尊父							

整形外科 外来診療

五八年五月現在、慶大整形外科の外来は別記の担当医で行なっております。

◎一般外来（受付午前八時四十五分～十一時）

月：泉田重雄教授

若野紘一（脊椎・脊髓）

火：内西兼一郎（手・肘）

竹田 毅（膝・リウマチ）坂巻豊教（小児・股関節）

水：平林 冽（脊椎・脊髓）

富士川 恭輔（膝・リウマチ）矢部啓夫（腫瘍）

木：戸松泰介（肩・膝）

里見和彦（脊椎・脊髓）堀内行雄（手・肘）

金：伊勢亀富士朗（膝・リウマチ）

福田宏明（肩）藤中星児（小児・股関節）

土：花岡英弥（腫瘍）

伊藤恵康（手・肘）

◎特殊外来（受付午後〇時三〇分～二時）

月：脊椎……平林 冽、若野紘一

関節……富士川恭輔、戸松泰介、竹田 毅

○御開業

2月	村上隆一君御尊父
2月	宇田正長君御母堂
5月	切東喜久夫君御尊父
6月	樋口智久君御尊夫
7月	村尾真俊君御尊父
9月	木住野喜義君御尊父
10月	土橋善蔵君御尊父
10月	浅井博一君御尊父
56年3月	生越 英二君
5月	小林 信男君
8月	岡田 菊三君
10月	関 宏君
57年4月	佐々木 正君
	大田 英和君
	塩原 治男君
	久保井 二郎君
	松 賢次郎君
7月	加藤 隆史君
10月	大平 民生君

木：手の外科……内西兼一郎、伊藤恵康、堀内行雄

小児、股、足……坂巻豊教、藤中星児

金：腫瘍……花岡英弥、矢部啓夫

側彎……土方貞久、鈴木信正



教室秘書紹介

現在教室には写真の三人の秘書がおります。松岡さんには泉田教授秘書をお願いしています。皆さん美人で独身、明朗なかたばかりですのでどうぞお気軽に教室にお立寄りいただきたいと思います。

右から、浜田康子さん、岡本ひろみさん、松岡田佳子さんです。



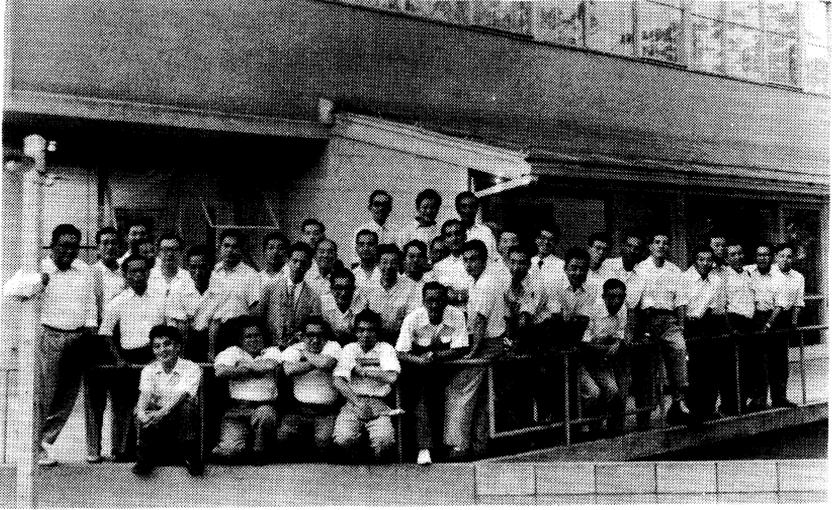
古いアルバムから

昔のアルバムから見つけ出してきた写真をのせてみました。
どなたが写っていらっしゃるか、おわかりになりますか。



開局記念祝賀会 昭和25年10月21日
(於 新館平面講堂)







編集後記

整形外科教室開設60周年ということで特集いたしました。届けるのが遅れて申し訳ありませんでした。

教室初期の医局生活に関する多数の原稿をお寄せいただき有難うございました。現在では500名を越す大きな同窓会となり、昔の家族的な雰囲気はともすれば失なわれがちですが、今こそ皆が慶応義塾の伝統の精神である「社中協力」の気持をもって発展に協力する時期であると思います。

慶応病院新棟建設も具体的な設計がすすんでいるようであり、また泉田教授の日整会総会会長立候補のこともあり、同窓会員皆が活力を表に出さなければならぬと思う次第です。

(宮本銈造)

バランスがよい

自覚症状
改善作用



脳温度調整

随意運動
改善作用

鎮静・催眠作用が少ない

脳卒中後遺症や頸部脊椎症のつっぱり、こわばりや歩行などの改善に

中枢性筋弛緩剤

片(要指)

ミオナール

錠50mg

顆粒10%

ミオナールは自覚症状改善作用と随意運動改善作用を発揮し、鎮静・催眠作用は少ないことから、バランスよく諸症状を改善する。

適応症

下記疾患による痙性麻痺

脳血管障害、痙性脊髄麻痺、頸部脊椎症、術後後遺症(脳・脊髄腫瘍を含む)、外傷後遺症(脊髄損傷、頭部外傷)、筋萎縮性側索硬化症、脳性小児麻痺、脊髄小脳変性症、脊髄血管障害、スモン(SMON)、その他の脳脊髄疾患。

●ご使用に際しては添付文書をご参照下さい。



イーザイ

東京都文京区小石川4
C-G2 8405

腰痛症、歯髓炎、歯根膜炎の
適応症が追加になりました。

フロベンに



Froben

鎮痛・抗炎症剤



フロベン[®]

[1錠中：フルルビプロフェン40mg含有]

フロベン[®]顆粒

[0.5g中：フルルビプロフェン40mg含有]

●フロベンの動物実験による薬理作用

抗炎症作用はアスピリンの250～790倍、鎮痛作用では80～1500倍の薬理作用が認められている。(1)(2)

●プロスタグランジン生合成酵素阻害作用

フロベンは炎症・疼痛との関連が深いとされているプロスタグランジンの生合成を阻害する。

モルモット肺組織ホモジネートでの50%プロスタグランジン生合成阻害活性はインドメタシンの10倍、アスピリンの2280倍に相当する。(3)また、慢性関節リウマチ患者の滑液中で、インドメタシンよりも少量でプロスタグランジンの生合成酵素阻害作用を現わす。(4)

(1)高瀬健一郎：日本薬理学雑誌, 71, 573, 1975

(2)S.S.Adams et al.: Arzneim-Forsch, 25, 1786, 1975

(3)舛本省三他：日本薬理学雑誌, 72, 1025, 1976

(4)Bacon, p.A et al. Curr. Med. Res. Opin., 3, Suppl., 4, 20, 1975

●適応症

- 下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、歯髓炎、歯根膜炎
- 抜歯並びに歯科領域における小手術後の鎮痛・消炎
- 薬価基準収載
- 提携：ブーツ社 イギリス
- 使用上の注意等は添付文書をご参照ください。



科研製薬株式会社

東京都文京区本駒込2丁目28-8

[昭和57年10月 社名変更]

甦る
血流

Brendil

- [作用] ①脳および脳局所の血流増加
②赤血球変形能の改善
③赤血球酸素解離能の促進
④脳代謝の賦活

[適応症] 下記疾患にもとづく諸症状の改善
脳梗塞後遺症、脳出血後遺症

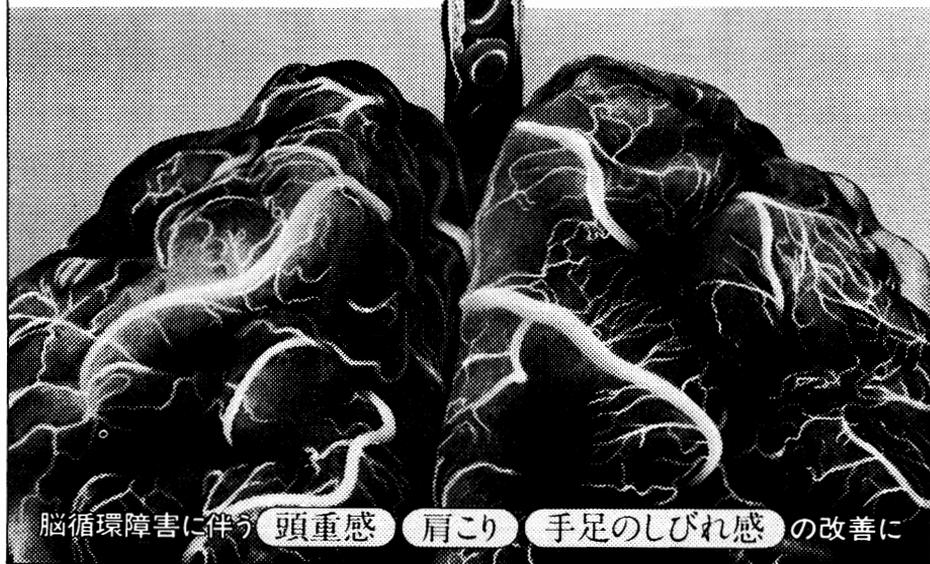
★ご使用に際しては製品に添付の説明書をお読み下さい。

脳循環代謝改善剤 薬名 健保適用

ブレンディール

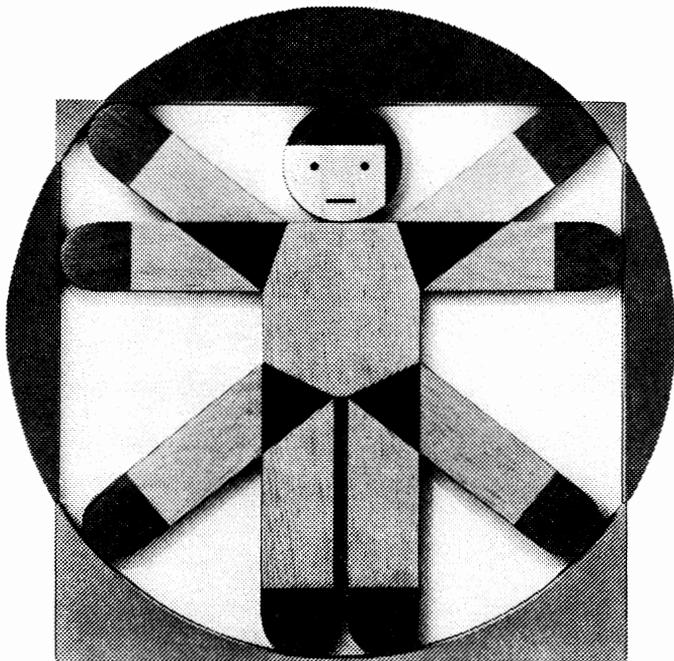
一般名: Cinepazide

第一製薬株式会社 ●京都中央区日本橋三丁目14番10号



脳循環障害に伴う 頭重感 肩こり 手足のしびれ感 の改善に

筋緊張異常亢進に伴う不快な症状を
やさしくときほぐします。



筋緊張性疾患治療剤

アロフト[®]

Arofuto[®] (要指)
健保適用

【効能・効果】

下記疾患による痙性麻痺

脳血管障害、脳性麻痺、痙性脊髄麻痺、脊髄血管障害、頸部脊椎症、後縦靭帯骨化症、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、外傷後遺症（脊髄損傷、頭部外傷）、術後後遺症（脳・脊髄腫瘍を含む）、その他の脳脊髄疾患

【用法・用量】

通常成人には1回1錠(20mg)を1日3回(60mg)経口投与する。

年齢、症状により適宜増減する。

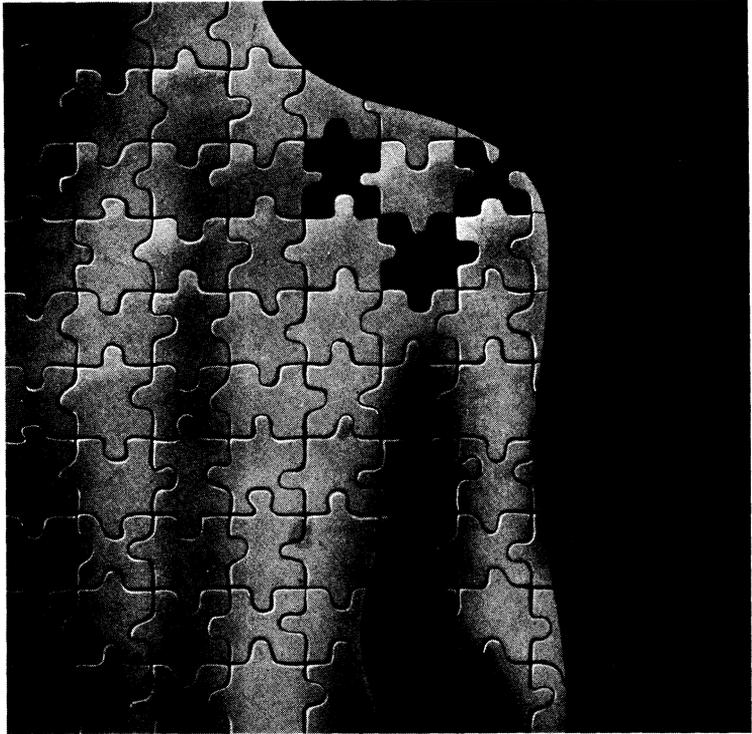
※使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。



田辺製薬株式会社

大阪市東区道修町3丁目21番地

肩関節周囲炎に



モビラート軟膏

組 成	1g 中	
	ヘパリン類似物質	2.0mg
	副腎エキス	10.0mg
	サリチル酸	20.0mg

適応症 変形性関節症(深部関節を除く)、関節リウマチによる小関節の腫脹・疼痛の緩解、筋・筋膜炎腰痛、肩関節周囲炎、腱・腱鞘・腱周囲炎、外傷後の疼痛・腫脹・血腫

用法・用量
通常、1日1-2回、適量を塗擦またはガーゼ等にのばして貼付する。症状により密封法を行う。

包 装
50g, 100g (10g×10)
1kg (20g×50), 2kg (50g×40)

使用上の注意については、製品添付文書をご参照ください。

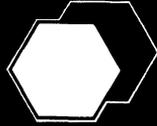
製 造
販 売

マルホ株式会社
大阪市大淀区中津1丁目6-24
Tel.06 (371) 8876 (代)

提 携

ルトポルド・ウエルク製薬会社
ドイツ・ミュンヘン

薬価基準収載



非ステロイド性消炎・鎮痛剤

クリリル錠[®] 100/50

(スリダク錠)

選択的作用

*A Selective Activity
at Vital Organ Systems*

- 活性型が選択的に炎症部位で効果発現
- 胃腸管には主に不活性型が接触するため胃腸障害が少ない
- 腎でのプロスタグランジン生合成阻害作用はみられないことが報告されている¹⁾²⁾

1) Patrino, C. Clinical Pharmacology of Non Narcotic Analgesics, in "Elementi di Fisiopatologia clinica del dolore," E. Arcuri, F. Calabresi and G. Moricca (eds.), Lega italiana contro il dolore, 1980, pp63-73.
2) Ciabattini, G et al. Europ. J Rheumatol. Inflamm. 3,210, 1980.



※「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意」などの詳細については製品本付文書等をご参照ください。



製造 日本メルク萬有株式会社

東京都中央区日本橋 3-9-2



販売 萬有製薬株式会社

東京都中央区日本橋本町 2-7-8

10-83 COR 82-J-229J

痛みを切る

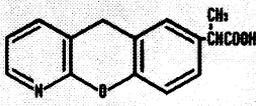
この強力な鎮痛作用 そして抗炎症・解熱

- 炎症・疼痛性疾患の疼痛・炎症に
- 急性上気道炎の発熱・疼痛に

鎮痛・抗炎症・解熱剤

ニフラン[®]カプセル^剤

ニフランは、国産初の三環構造をもつ
プロピオン酸系 鎮痛・抗炎症・解熱剤



一般名：プラノプロフェン

- ①鎮痛・抗炎症・解熱の3作用をバランスよく、レガも強力に示します。
- ②慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛、頸肩腕症候群に伴う疼痛に対し強力な鎮痛効果を示し、レガも効果の発現が速やかです。
- ③急性上気道炎に対し、速やかな解熱・鎮痛効果を示します。
- ④小型で服用しやすいカプセルです。

【副作用】

慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、頸肩腕症候群、歯根膜炎の消炎・鎮痛
急性上気道炎の鎮痛・解熱
外科手術後、小手術後ならびに抜歯後の消炎・鎮痛

【用法・用量】

プラノプロフェンとして、通常成人1回75mgを1日3回食後に経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。頓用の場合には1回75mgを経口投与する。

【使用上の注意】

1 一般的注意 1) 消炎鎮痛剤による治癒は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。2) 慢性疾患(慢性関節リウマチ、変形性関節症)に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
ア、長期投与する場合には定期的に臨床検査(尿検査、血尿検査および肝機能検査等)を行うこと。また、異常が認められた場合には減量・休薬等の適切な措置を講ずること。イ、薬物療法以外の療法も考慮すること。3) 急性疾患に対し、本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。ア、急性炎症・疼痛および発熱の程度を考慮し、投与すること。イ、原則として同一の薬剤の長期投与をさけること。ウ、原因療法があればこれを行うこと。4) 患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。5) 感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染による女性に対して用いる場合には適切な抗菌剤を併用し、観察を十分行い、慎重に投与すること。6) 他の消炎鎮痛剤との併用はさけることか望ましい。7) 高齢者および小児には副作用の発現に特に注意し、必要最小量の使用にとどめること。8) 2次の患者には投与しないこと。1) 消化性潰瘍のある患者。2) 重篤な血尿の異常のある患者。3) 重篤な肝障害のある患者。4) 重篤な腎障害のある患者。5) 本剤に過敏症の患者。6) アスヒリン喘息またはその既往歴のある患者。3次の患者には慎重に投与すること。1) 消化性潰瘍の既往歴のある患者。2) 過敏性の既往歴のある患者。3) 気管支喘息の患者。

【包装】

ニフランカプセル(75mg) 500カプセル、1,000カプセル(10カプセル×100)、3,000カプセル(10カプセル×300)

【使用上の注意】の詳細(取扱)上の注意事項等については添付文書をご参照下さい。

(健保適応)



吉富製薬株式会社

〒541 大阪市東区平野町3丁目35番地



炎症性疼痛に

■作用特性

- 鎮痛作用、抗炎症作用ともに強い
- 消化管潰瘍形成作用が弱い
- 経口投与で吸収速やか
- 炎症部位への移行性が高い

●適応症

下記疾患ならびに症状の鎮痛・消炎
変形性関節症、頸肩腕症候群、腰背痛症
下記疾患の鎮痛・解熱

上気道炎

外傷ならびに手術後の鎮痛・消炎

●用法・用量

トルメチンとして、通常成人1回200mg
を1日3回食後に経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減する。

●使用上の注意、取扱い上の注意
添付文書をご参照ください。

●包装

錠100mg 100錠 1,000錠 5,000錠

錠200mg 100錠 1,000錠 5,000錠

●薬価基準

錠100mg 1錠 35.70円

錠200mg 1錠 63.70円



TOLECTIN

鎮痛・抗炎症・解熱剤

トレクチン[®]

① トレクチン錠100mg

② トレクチン錠200mg

〈トルメチンナトリウム錠〉



大日本製薬

大阪市東区道修町3-25
提携 マクニール社(米国)

新世代を大きくひらく——

オキサセフェム系抗生物質製剤

シオマリン[®]

静注用

筋注用

日抗基 注射用ラタモксеフナトリウム略号LMOX



シオマリンは、塩野義製薬研究所で合成されたオキサセフェム系の抗生物質ラタモксеフナトリウムの注射用製剤で、従来のセフェム系抗生物質(セファロスポリン系又はセフェマイシン系)とは化学構造が異なる新しい世代の抗生物質です。●とくにグラム陰性菌及び嫌気性菌に広い抗菌スペクトラム、強い抗菌力を示し、殺菌的に作用します。● β -lactamaseに極めて安定で、 β -lactamase産生によるペニシリン系及びセフェム系抗生物質耐性菌にも強い抗菌力を示します。●薬価基準取載

- シオマリン 静注用0.25g、0.5g、1g、シオマリン 筋注用0.5g(溶解液付)
- 添付説明書の使用上の注意をご参照下さい。



シオノギ製薬

大阪市東区通修町3-12